イタズラ

黒い夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イタズラ

【Ｎコード】
Ｎ７５９０Ｆ

【作者名】
黒い夢

【あらすじ】
幼なじみの白鳥姉妹と仲がよい俺＝黒井夢。苦しい受験勉強が実り、春から姉のユリと一緒の高校へ。楽しい高校生活が待っていると思っていたら、想像以上の…！？※ただいま休載中。

プロローグ（前書き）

三角関係…、かと思いきや、甘々な話です。
幼なじみから、少しずつと変わり始める三人の関係です。

プロローグ

俺は黒井夢（クロイユメ）。
夢という名前が女っぽくて悩みなんだが、それ以外は平凡な少年だ。
自分でいうのも何だが、特に秀でたものはない。
人並み外れた女顔とか、女装が趣味とか、そういうこともない。
『すごい普通』と人からよく言われる。

だが、そんな俺が唯一自慢できることがある。
もちろん、俺自身のことではない。
俺の幼なじみたちが自慢なんだ。

隣の家に住んでいる、産まれた時からの知り合いである白鳥姉妹。
姉の優里（ユリ）は俺の同級生。
すらっとした美しい立ち居振る舞いと、腰まである艶やかな黒髪が目を引く和風美少女だ。
頭も素晴らしく出来がよく、中学では学年で五番より下になったことがない。
人当たりがちょっとキツいのが玉にキズだが、生徒会長をやっていたので人望はある。
というか、
「クールなところが素敵！！」と男女問わずファンが多い。

そして、一つ年下の妹、冬歌（トウカ）。
トウカは姉と違っていつもにこやかで、人懐っこくお喋りが大好きだ。
髪型も美容師にカットしてもらっているし、最近は化粧品集めが趣味でますますキレイになっている。
そのトウカの夢はアイドル。

某芸能事務所にスカウトされ、デビュー目指して毎日頑張っているらしい。
学校中の男子がメロメロだが、女子にも友達が多いのはトウカの人徳だろう。

で、俺はこの二人の幼なじみで、仲も悪くない…というか、かなり仲がいい。
これが俺の唯一の自慢だったのだけど。

最近、誰にも言えないもう一つの自慢が出来た。

第一話：俺とユリ

素晴らしい天気。
買ったばかりの真新しい制服に身を包み、俺は家を出た。

今日は初登校。
太陽を睨んで

「入学式を目前にドキドキが止まらないぜ！」

とか叫びたくなるほど気分が高揚している。
昨夜はろくに眠れなかったからそれも影響しているのかもしれない。
まあ、そんな気分で門から第一歩を踏み出し…。

「…朝から騒がないで」

かけて、水を差された。

「たかが入学式じゃない。あまりはしゃがないでよ」
「…そうですねー」

斜め後ろ、白鳥家の玄関からかけられたユリの声に、テンションがた落ちの俺。

別にユリに叱られて落ち込んだわけじゃない。
ただ、先ほどのセリフをいつの間にか口にしていて、ユリに聞かれていたというのがショックだったのだ。

記念すべき初登校日の朝から恥ずかしい思い出をつくってしまった

…。

門に手をかけたまま落ち込む俺の視界に、見慣れない靴とスカートが入ってきた。

「ほら、クロ。満員電車につかまる前に行くよ」

そう言って俺の手をとり軽く引っ張るユリ。
つられるように顔を上げ、俺は女神を見た。

俺とユリの高校はそこそこの進学校で、制服とか古いデザインのセーラー服なんだけど。

ユリ、似合いすぎです。

胸元にかかった黒髪と、ユリの肌と制服の眩い純白の対比が、えもいわれぬ美しさというか。今どき珍しいほどの長さのスカートなのだが、それもユリ本来の清純さを引き出し『女学生』という題の一枚の絵画を見ているかのようだ！

中学の制服から変わっただけで、こんなにも新鮮に見えるものなのか…。

「ユリ…」
「…な、なによ」
「すごく、大人っぽくて…綺麗だ」
「！」
「…あ」

衝撃のあまり口から何かこぼれ落ちた。

ユリがバッと顔を背ける。
し、しまった…、なにトチ狂ったことを言ってんだ、俺。

「あ、いや、その、今のは…」
「…」
「…も、もしかして怒った？　わ、忘れてくれ！」
「…」
「…あの、ユリさん…」
「…怒ってない」

絞り出すように小さな声で答えるユリ。

「…い、いいから行くわよ！」

俺の顔を見ないまま、ユリは歩き出した。そのまま付いていく俺。
胸がドキドキして苦しいのだが、これは寝不足や入学式を前にした緊張とかでない。

…手を繋いだまま歩いていることに、ユリはいつ気づくだろうか？

※

会話もなく、妙な空気のまま歩き続ける。駅が近づき人目が集まるのを感じるようになった頃、ようやくユリは手を離した。
だが、文句も何も言わず、黙ってブンブンと手を振っていた。

…俺はバイ菌か？

※

早めに出たおかげで電車は思ったよりも空いていた。
なんとか一人分の席を確保したので、ユリに譲る。

「…ありがとう」

ようやく言葉を発したユリの頬がかすかに紅くなっていて、その恥いった表情につい見とれてしまった。

※

急行を乗り継ぎ、１５分ほどで高校の最寄り駅に着いた。
下見や受験の時にも何回か来たのに、やっぱり緊張してしまう。

「…クスッ」

隣に立ったユリが小さく笑いをこぼす。

「クロ、変な顔」
「…そうか？」
「あ、ごめん。生まれつきこんな顔だったかも」
「マジですか！？」
「嘘。さ、行こう」
「あ、待てよ」

一人でさっさと歩き出したユリを慌てて追いかける。
楽しそうなユリの後ろ姿に、緊張などどこかにいってしまった。

※

駅から高校へ向かう通学路では、同じ制服を着た集団が群れをなし

ていた。
だが、その中でもやはりユリは目立っていた。
周りの衆目を集めながら平然と歩くユリ。
俺は少し離れた場所からその様子を見ていた。

駅を出てすぐ、同じ中学出身の女子がユリの周りを囲んではじき出されたのだ。
とりまき？連中は鼻高々でユリに話しかける。
それを羨ましそうに見つめるお…、男子生徒たちと、妙に熱い視線の一部の女子。

まあ、中学での俺とユリの関係はこんなものだった。
多分、高校でも変わらないだろう。

※

さて、昇降口の横に人だかりが出来ていた。
どうやらクラス分けの掲示板らしい。
先に行ったユリと取り巻きの姿が見える。その中の一人が飛び上がって喜んでいた。
「やったあ！　白鳥様と一緒のクラスだ！」
「なんであんただけ……」
「……呪われなさい……」
「羨ましい……」
どうやら一人だけユリと同じクラスになって喜んでいるようだ。

「なみ、五月蝿い」

ユリがはしゃぐ女子（どうやらなみと名前らしい）に冷たくいう。
「あ、ごめんなさい…」

「周りのことを考えなさいよ」
「…いいきみ…クスクス…」
「まったく、子供なんだから」
しょんぼりするなみと、追い討ちをかけるその他三人。
「…なんで、あんなに人気あるんだろう…」
不思議というか、理不尽だと思う。
そんな光景をほんやりと見ていたら、ユリが俺を向けた。
そして、声を出さずに口を動かす。

『一年間よろしく』

一瞬浮かんだ笑みに目が眩む。
俺はユリと同じクラスだった。

※

クラスの中は雑然としていた。
同じ中学出身で固まり話をしている。
だが、残念なことにこのクラスの同中が全員女子だったので、俺は話す相手がいない。
周囲に人垣ができているユリの様子を見ていたら、後ろから声をかけられた。
「お、君もあの子見てんの？　本当にかわいいよねー」
振り返ると見知らぬ男子が座っていた。
男の俺から見てもカッコイいと思う、茶髪のイケメン。
学ランを着くずしている姿もなかなか決まっている。
「…今、俺に話しかけたのか？」
「もちろん。他に誰もいないじゃん」
「…そうだな」

「で、あの子見てたろ？」
指差した先には、当然ユリがいる。
「…ああ」
「かわいいな～、というか綺麗って感じだな～」
「…ああ」
感心したように言うイケメン。俺も否定しない。事実だからな。
「というわけで、今から俺とお前は友達だ」
「ちょっと待て！」
唐突に友達宣言をするイケメン。
「何で突然。名前すら知らないだろ」
当然のことを言う俺は、鼻で笑われた。
「はっ…、簡単な理由さ」
さも当然のこと、と言わんばかりのイケメン。
「女の好みがあう相手に、悪い奴はいない！」
世界の真理がそこにあった。
「というわけで、俺は高野大介。大介と呼んでくれ」
「俺は黒井夢。名前が嫌いなんで黒井と呼んでくれ」
「…そうか」
何故かしょんぼりとする大介。
「…まあよろしくな、大介」
俺たちは固く握手を交わし、友情を確認した。
※
「なー、この後どうすんの？」
担任の挨拶が終わり、生徒たちがバラバラと帰っていく。
入学式があったとはいえ、時刻はまだ昼前。
弁当もないし、どっかに食べに行くのも悪くはない。

「そうだなー…」
生返事を返しつつ、何気なくユリをチェックすると、すでに鞄を手にして帰る準備を終えている。ユリと一緒にどっかの店に入るってのもよかったんだが…。
俺はユリの様子に素直に諦めた。
「なあ、俺この辺地元だから、美味い店知ってるぜ」
どうしようか悩んでいたら、大介がなかなか魅力的な提案をしてくれた。
「あー、じゃあ…」
俺はその提案に乗ろうとした。
今日は入学式だが、実は俺の両親は来ていない。
一週間前から、夫婦でブラジルに出張しているのだ。
帰国時期は不明。
だからこのまま大介に付き合うと言おうした時、携帯がメールを受信した。
送り主はトウカ。
文面は一言だけで、画像が一枚ついていた。

『食べて♪』
――ｗｉｔｈトウカの新妻風エプロン画像。

「すまん！」
「あ、黒井！？」
はるか後ろで大介の戸惑う声が聞こえたが、そんなもので俺は止められない！
そして、黒井夢は風になった…。

第二話：俺とトウカ

電車にのっている間に正気に戻ってしまった。
とりあえず普通に家に帰り、着替えてから白鳥家へと顔を出す。
ドアホンを鳴らすと、すぐにトウカが笑顔で出迎えてくれた。
トウカはテレビに出てるアイドルよりもよほど愛らしい。動物に例えると、ユリが気位の高いボス猫ならば、トウカは人懐っこい小型犬って感じだ。
茶色がかった髪を肩のラインで切り揃え、ナチュラルメイクが少女らしさと女性らしさを同時に許容させている。
上は白いブラウスで、下は淡いピンクのミニスカート。…そこからのびる綺麗な足はなるべく意識の外に置いておくとして、先ほどの写メに写っていたフリルがふちに飾ってある可愛いエプロンをつけていた。
あと、俺の胸元くらいの背丈しかないのに、中学生とは思えない大きな凶器を二つぶら下げている。
まさに、白鳥家の最終兵器と言える存在だろう。

「クロちゃん、お帰りなさーい！　ご飯にする？　お風呂にする？
…それともわ・た・し？」

「ぶほっ！」
俺は出会い頭の必殺技に崩れ落ちそうになった。
「…ふっ…成長したな、トウカ…」
「…軽い冗談のつもりだったんだけど」
軽く困惑したようなトウカだったが、あまり気にせずそのまま家に上げてくれた。
「おじゃましまーす」
「挨拶なんかいいから、早く早く！」

妙に急かすトウカ。
「おいおい、そんなに腕を引っ張んなよ」
「だって待ちきれなかったんだもん！」
笑顔を浮かべたまま、ぐいぐいと腕を引く。
「まったく…。あ、そういえばさっきのメールなんなの？　それにその格好…」
「えっへん。可愛いでしょ？」
胸を張ってそう答えるトウカの格好は、写メに写っていたまんまのエプロン姿。
「すごく可愛いよ」
俺は素直に感想を言った。
「ありがとう♪　お世辞でも嬉しいよ～」
「いや、本当によく似合ってるよ」
「…そ、そう？　ありがとう！」

ムギュ

俺の腕にトウカの豊満な胸が押しつけられる。
「ト、トウカ！？」
「えへへ、お礼だよ♪」
愛くるしい、小悪魔のような笑顔を見せるトウカだった。

※

パッカーン！
「「夢君、高校入学おめでとうー！」」
「…ありがとうございます、おじさん、おばさん」
リビングに入るとユリとトウカの両親が揃って出迎えてくれた。
「クロちゃん、おめでとー」

「…ありがとうトウカ」
横にいたトウカも祝福の言葉をくれた。
テーブルの上には彩りどころのたくさんの料理。
そして私服に着替えたユリがいた。淡い水色のワンピースが良く似合っている。
「…おめでと、クロ」
「…ありがとう、そっちもおめでとう」
「…ありがと」
「クロちゃん、お姉ちゃんはほっといていいから、ここに座って！」
ぎこちなく言葉を交わす俺たちの間に割り込むように、トウカが席に案内する。
「実は今日の料理は、わたしが作ったんだよ！」
隣に座ったトウカがエプロンをとりながら言う。
「へえ、すごいじゃん！」
「…作ったって言っても、ほんのちょっとじゃない」
「お姉ちゃんうるさい！　黙って食べててよ」
「…はいはい」
「あはははは…」
テーブルは六人掛けなのだが、俺の隣にトウカ、ユリという順。
ユリの正面にはおじさん、トウカの正面にはおばさんが座っている。
以前から何度もお邪魔しているんだが、だいたいこの位置で食事となる。
「そういえば、夢君と優里はまた同じクラスだったんだってね」
「え～、お姉ちゃんズルーい！」
「あら、これで何年目かしら…」
「確か幼稚園で同じ組になった時からじゃないか？」
「いいなー、わたしは一度も同じクラスになったことないのに…」
「当たり前じゃない、バカ冬歌」
「バカじゃないもん！」
「はいはい。…ごちそうさま、私もう部屋に戻るね」

真っ赤になって怒るトウカを置いて、ユリは二階の自分の部屋へと戻ってしまった。
「お姉ちゃんのバカー！」

「で、夢君。優里は学校で上手くやっていけそうかい？」
トウカが落ち着いたところで、おじさんに声をかけられた。
「えっと、はい。何でこんなに？って思うくらい人気ですね」
学校での様子を思い返すが朝、昼ともにユリの周りには人垣が絶えなかった。
高校で初めて会ったばかりの相手すらも、すでに魅了しているらしい。
「ふん！　みんな見かけに騙されているだけだもん！」
トウカがぷりぷりと怒る。
「…あー、そうかもね」
適当に相槌をうつが、掲示板の前でのユリの笑顔がふと浮かんだ。
「…クロちゃん、今、何考えたの？」
「べ、別に何も？」
「ふ～ん…」
じと目で睨まれてしまった。
「ま、いいや。ご飯食べ終わったよね？　わたしの部屋に行こうよ！」
「ちょっ、まだそんなに食べてない…」
「いいから来るのー！」
「うわー！」
こうして、トウカに引っ張られていく俺。

…いや、手にまだ箸とお茶碗持ってんだけどね？
どうしよう？
あっ、おじさん、おばさん！
手を振って見送らないでくれ～！

※

「クロちゃーん！」

どすっ

「ぐふっ！」

ばたっ…

「…トウカ、鳩尾に入ったぞ…」

いきなりベッドに押し倒された俺。

なんとかお茶碗だけは死守する。

「気にしない、気にしない」

トウカは目を細めて幸せそうに微笑み、俺の上でゴロゴロと猫のように丸まる。

「今朝は二人とも先に行っちゃったから、充電なの」

この前まで三人で登校していたから、一人だけとり残されたようで寂しかったのかもしれない。

だったら、ここは男らしく胸の一つや二つ貸さないといけないだろう。

「…はいはい、存分にどうぞ」

お茶碗はベッドの枕元に置いて、トウカを抱き締めながらなるべく平静を取り繕う俺。

いや、あのね？　トウカの行動なんて子供っぽいと笑ってすませたいんだけど。

トウカの体はすごく柔らかくて、温かくて、甘い香りがした。

大きな胸が押しつけられる感触なんか、到底言い表せない。

そして、トウカの腰が何となくアレに当たっているというか、微妙

に刺激されているような…。

「…」

…とにかく、ヤバい！

平常心、平常心。静まれ俺ー。

心臓がバクバクいってかなり興奮しているんだけど、胸元でのん気な顔を見せるトウカにばれないように精神集中をする。

そう、トウカはまだまだ子供だからな！

「あのねー、クロちゃん」

甘えた声をあげるトウカ。

「んー？」

「わたし、今日告白されちゃったー」

俺の努力を粉砕する、爆弾発言投下！

「…あー、そう、か…」

…俺にどう応えろと？

「同じクラスの友達でね、けっこうカッコいいの。サッカー部のエース！」

「ふーん…」

素っ気ない返事をする俺。

なるべく動揺が表情に出ないようにしているが、トウカは身を起こして覗き込むように見つめてくる。

よく見慣れているはずの瞳が、何となく妖しく輝いているような…？

「ねえクロちゃん、…わたし、どうしたらいいと思う？」

なぜ俺に聞くんだ！？

何故か嫌な感じの汗が吹き出てくる…。

いや、正直に言えば嫉妬しますよ。

生まれた時から知っている可愛い幼なじみに、もしかしたら恋人が

できるかも、なんて考えただけで嫌です。
…でも、俺にそんな発言する権利なんかないし…。
俺はトウカの顔を見た。
キラキラした瞳で俺の言葉を待っている、とっても可愛い女の子。
好きか嫌いかで言ったら、もちろん好きだ。
だけど。
俺の脳裏にもう一人の幼なじみの笑顔が浮かぶ。
「…トウカは、そいつのこと、好きなのか？」
「んー、ただの友達、かな…」
「…好きじゃないなら、断っていいんじゃないか」
トウカの返事に安心しながら、ありきたりなことしか言えない。
「でもね…、…その…」
急にもじもじとしだすトウカ。いつもはっきりと話すのに、恥ずかしそうにしてなかなか言い出さない。
「…どうした？」
「…わたしの友達、みんなもう経験してるんだ…」
「ぶほっ！」
何の脈絡もない告白に、吹き出してしまう俺。
「…きゅ、急に何を…？」
トウカは悲しそうな顔をして話を続ける。
「みんなキスしたことあるんだって」
「…ああ、キ、キスの経験か」

最近の中学生は進んでるとか聞いたけど、そんなものか。…そうだよな？
「だから…、わたしも彼氏つくってキスしてみたいの」
「いや、それは違うんじゃないかな？」
「なにが？」
「キスは、その…、好きな人とするもんだろ。その為に彼氏をつくるのはどうかな、って」
そう言った俺に被さるように、急にトウカが顔を寄せた。
「じゃあクロちゃん、彼氏つくらないからキスしてくれる？」
「なんでそうなるんだ！？」
慌てて押し退けようとするが、トウカは期待に眼を輝かせてますますベッタリとくっついてくる。
トウカの左足は俺の膝の間に割り込み、大きな胸を押しつけてくる。
こ、この体勢はヤバい！
「クロちゃん。…トウカのこと、嫌い？」
両手で俺の顔を挟んで、トウカは真っ直ぐに見つめてきた。
「嫌いじゃ、ない」
「…よかった…」
安心したようなトウカの顔が、ゆっくりと近づいてくる。
息が頬をくすぐる。胸が痛いくらいに高鳴って、このまま心臓が壊れてしまうんじゃないかと不安に思ってしまった。
「…ト、トウカ…」
俺たちの唇が重なりそうになって…
「なんちゃって♪」
トウカは身を起こすと、にっこりと笑った。

※

「…からかったのか？」
「えへへ。二人してわたしのこと置いていくから、お仕置き～」
「…まったく、もう」
一気に気が抜けた…。
「あ」
「…え？」
トウカが何かに気がついたように声をあげて、顔がみるみる紅くなる。
「…クロちゃん…」
「何？」
「…トウカの足、何か、…かたいのが…」
「ええ！？」
興奮したせいか、俺のアレはすっかり大きくなって、トウカの足にあたっていた。
「ご、ごめん！」
驚いて身動きした瞬間、体の中心に快感が走った。
「きゃあああ！　何か、何かあたってるう！」
「ごめん、本当にごめん！」
慌てて離れたが、二人とも顔を真っ赤にして言葉もなかった。
潤んだ瞳で睨みつけてくるトウカを見て、申し訳なく思いながらも俺は思った。
（こりゃあ、まだまだ経験がどうとかじゃないな…）
それが嬉しいことか残念なことか、わからないけど。

※

「…あの、高校とか、どう？」

机の椅子に逃げたトウカが、呟くように聞く。
「え？　あ、さっそく友達が一人できたよ…」
俺もその言葉に乗って普通に話し始めた。

しばらく話をした後、外が暗くなったので俺は帰ることにした。
トウカが立ち上がって見送ろうとするが、俺はそれを止めて部屋を出る。
「じゃあ、クロちゃん、またね。…また今度、ね♪」
…最後に聞こえたトウカの声に、妙にドキッとした…。

※

家は隣なので、一分もかからず帰宅した。
二階の自分の部屋に上がると、窓から白鳥家の灯りが見える。
二階にある二部屋、道路に近い側の薄いピンク色のカーテンがかかった窓と、もう片方の明るい緑色の窓が、それぞれトウカとユリの部屋だ。
二人のことを――俺はどっちが好きなのかを考えながらベッドに倒れ込む。

まだ日が沈んだばかりだが、俺の意識はそのまま眠りの海に沈んでいった…。

第三話：『好き』

翌朝。
ギリギリまで寝て、コーンフレークをかっ食らって顔を洗う。
料理はそこそこできるが、毎朝つくるのはめんどくさいので、最近の朝食はずっとコーンフレークだ。
（もっと野菜とかとるべきかな…）
そんなことも思うが、昼か夜に買って食えばいいだろう。
俺は急いで支度をして家を出た。

「遅い」
「うわっ！」

ドアを開けると、目の前にユリが立っていた。

「ごめん、なんか昨日は疲れちゃって…」

適当に言い訳したのだが、ふとトウカとの出来事を思い出してしまった。
（トウカも大人になっ…）

「クロちゃんお疲れなの？」
「うわああ！　ト、トウカ…？」
「？　そうだけど？」

ちょっとエッチは考えになりかけたところで、トウカ本人に遮られた。

「途中まで私達と一緒に行きたいんだって」

「トウカだけ仲間外れは許さないからね！」
「はいはい」
しっかりと俺とユリの手を握るトウカ。
そんな妹をユリが優しい眼差しで見ていて、俺もちょっとジーンとした。
※
「ほらクロ、急いで！」
結局、トウカが駄々をこね、なかなか離れなかったので駅に着くのが遅れた。
昨日より二本遅い電車の中は、すごく込み合っていた。
十分足らずでこんなに変わるのか、と思いながらユリを壁際に寄せる。
俺は手を壁について、ユリとの間に隙間をつくった。なるべくユリに負担をかけないためだ。
「はあ、はあ……。トウカのせいで、ごめん……」
ユリは俺に背を向けていたが、かすかに清潔感のあるユリの香りがした。
※
駅に着くと、昨日と同じようにユリと別れる。
大介は地元だと言う言葉の通り電車通学ではないらしい。
他に知り合いがいないかと周囲を見たら、中学の友達三人組がいたので、そいつらと一緒に登校することにした。

「おはよー」
「あ、黒井じゃん。久しぶり」
「お前一人？　白鳥様は？」
「一緒にいないの？　まあ当然か」

卒業式以来だというのに、なんと薄情な奴らだろう。

「……あそこ」
「おお！」
「今日も麗しい」
「くう…、最早悔いはない」
「お前ら幸せだな…」
「「「もちろん！！！」」」

悩みがなさそうな笑顔を見せられた。

「あ、そういえばお前知ってる？」
「んー、…何を？」

すぐ隣に居た奴が聞いてきた。

「白鳥様高校伝説その１」
「なんだそれ！？」

唐突に言われた内容に、仰天する他なかった。

「ああ、昨日の帰りだろ？」
「そうそう。入学式で白鳥様に惚れた連中がラブレター入れまくったってやつ」

「あれ？　昇降口で列をなして待っていたって聞いたけど」
奥の二人も食いついてきた。
…どうやら、すでに周知の事実となっているらしい。
「いや、俺は実際に見たけど、ファンクラブをつくって校門のところで静かに見送ってた」
そう言って【白鳥会・高校生用】と書かれた会員証を誇らしげに見せてくる。番号は００２７。多いか少ないのか全くわからない。ただ、あとの二人が羨ましそうに見ていた。
お、俺は別に羨ましくなんかないからなっ！
…誰に言い訳してんだろうと、ちょっと恥ずかしくなる。
そういえば、昨日は校門の辺りに人だかりができていた気がする。トウカの写メの件で頭がいっぱいだったので、全然気にしていなかったけど、俺が帰る前にそんなことがあったのか。
「そういうわけでお互いに牽制しているんだけど…、多分今日とか抜け駆けする奴らが出てくるんじゃないか」
「春だもんなー」
「懐かしいなー」
「「うんうん」」
頷きあう三人。
実は、こいつら三人はユリに告白して振られた過去を持つ。
冗談みたいな話だが、春になって新入生が入ると、ユリとトウカに告白が殺到するというのが毎年の恒例のようになっており、中学の入学式後すぐに告白をしたのだ。

もちろん、三人とも振られている。
…ちなみに、俺がどういう立場と見られていたかいうと、ユリの（手のかかる）弟分。恋人と疑われたことは、一度もない。
（はあ、…またか）
気苦労の多い時期になったと思い、俺は深々とため息をついた。

ユリはいつものように全て断ると思う。
だけど、もしかしたら…。とか考えると胃が痛くなってくる。

「あ、俺の教室向こうだから」
「おー、じゃあな」
「ばーい」
「達者でなー」

三人組と別れ、俺は自分の教室に向かう。横目でとユリを見ると、女子に囲まれた中、涼しげな顔で颯爽と歩いていた。

端から見てもカッコ良くて…胃が痛い。

※

「これ見てくれよ！」
教室に入ると、さっそく大介が話しかけてきた。
その手にあるのは、例の会員証。
「ほらほら、すごくキリのいい数字なんだぜ」
会員番号を見ると０１００だった。
「ふーん、おめでとう」
「すごい冷たい反応！？」
大げさな態度で驚かれた。ちょっと周りの視線が恥ずかしい。
「…大介、朝からうるさいよ。ほら、周りの人もびっくりしてるじ

ゃないか」
仕返しに軽くたしなめてみた。
「あ、ごめん、悪かったよ…じゃなくて！　ファンクラブなんてあったの？とか１００人もいるの！？とか言うことあるだろ」
ノリ突っ込みをこなす大介。…なかなかスペックが高いな。
なので仕方なく付き合ってやることにした。
「ああ…何すんの？」
「すごく投げやりだな！」
「うるさい」
「はい、すみません。…なんか妙に上から目線じゃない？」
「気のせいだろ」
「…そういうもんか」
それで誤魔化される大介は、とても素晴らしい友人だと思う。
「で、活動内容は？」
「その…、影ながら見守ったり？」
ストーキングか。
「犯罪だな」
「そこまで露骨じゃない！　…他には、校内で彼女に告白する順番を決めていたりするのだ」
「…で、大介が１００番目？」
「うむ」
「…気の長い話だな」
「大丈夫だ。その中には、彼女に過去に振られた連中やただのファンにすぎない生徒も多い。ファンクラブの半分以上が女子らしいしな」
「ふーん…って、めっちゃ多いな、女子！」
「ようやく驚いたか。…安心しろ、ガチはそんなにいないらしい」
「ちょっとはいるの！？」
…中学の時よりも確実に酷くなっていた…。
「そういうわけでお前も…」

「断る！」
「だが、早く入らないと会員番号が５００とかに…」
会員番号５００って…。今何人いるのか尋ねるのが怖い。
「…それでも、絶対嫌だ！」
「そうか…」
大介は悲しそうな顔をしたが、どうしても入りたくなかった。
なぜなら、俺はユリのファンの一人にすぎないと、自分で言っているような気になるからだ…。

※

放課後。
部活見学で美術部を訪れた。
実はユリは水彩を描くのが好きで、中学でも美術部に入っていた。
そして今朝、一緒に見学しないかとユリに誘われていた。

ユリが顔を出しても、新入部員候補として普通に扱われてた。
しばらくは平穏無事で、優しそうな美術部部長の説明を聞く俺とユリ（他五名ほどの見学者）。

だが。

「あ、白鳥様がいる！」
「ええ、どこどこ？」
「あそこだ！　美術部らしいぜ！」
ドドドドドド…！
騒々しい足音とともに何人もの声が聞こえ、そして。
「「「入部希望します！！！」」」
白鳥会のメンバーらしき連中がなだれ込んできた。

一気に人口密度が上がった美術室。
「…すみません、私、帰ります」
突然立ち上がったユリが、淡々と美術部の部長に告げた。
「え、あ、はい」
「それじゃ…」
みんなが戸惑うなか、一人で出て行こうとるユリ。
一見、普段と同じように見えるけど、…落ち込んでいる？
「あ、すみません部長、俺も帰ります！」
そう思った瞬間、俺は鞄を手に立ち上がった。

※

美術室から出てすぐ人にぶつかった。
「な、なん…」
絶句。
廊下を埋めつくす人の群れを、モーゼが海を割ったようにユリが進んでいた。
「う、うわっ…」
俺はそのまま人の波に飲みこまれていった。

※

「よ、ようやく追いついた…」
学校から出て全力で走り、なんとか駅前でユリに追いついた。
珍しいことに周りに誰もいない。
（…ユリのオーラを感じて逃げたのだろうか…）
もちろん、そんなことはない。
帰宅部の生徒たちと部活をする生徒たちの間に、たまたまぶち当たったのだろう。
だが、何故かユリは先ほどよりも一層不機嫌になっていた。

「…ユ、ユリ…？」
「…」
俺は恐る恐る話しかけたが、ユリは一瞥しただけで歩を緩めなかった。
そのまま電車に乗っても、ずっと無言だった。

「…クロ…」
「なに？」
ユリがようやく口を開いたのは、最寄り駅から降りて少し歩いたところ。
周囲に完全に人がいなくなってからだった。
「…今日はごめん」
しおらしく謝るユリは、やけに小さく見えた。
実際に俺の方が５センチくらい高いのだけど、普段と比べても儚げなのだ。
美術部のことがそんなにショックだったのだろうか？
「き、気にすんなよ！　どうせすぐ終わるって！」
とりあえず、俺はことさら明るく言った。
「そうかな…、あのさ」
「うん」
「今日また告白されたんだ、…三人に」
三人も！？
やっぱりユリの人気がすごい。
「…そうなんだ」
「みんな、知らない人だった。上級生ばっかり」
「…断ったの？」
「…うん」
「そう、か…」
「…あと、ラブレターが１０通くらいげた箱に入ってた」
「…」

沈黙が降りる。胸がもやもやして言葉につまった。
「ねえ…クロ…」
ユリが立ち止まって俺を見た。
「…うん？」
「男の人って、なんで話したこともない相手に好きって言えるの？」
「…わかんないよ」
ユリの質問に答えられず、視線をそらした。
「さっきのもそうだけどさ、あの人達は私の何を好きなのかなって、考えたの」
ユリは自問するように言葉を紡ぐ。
「中学の頃は、部活にまで押しかけられたことなんてなかったのに。…他の人、困っていたよね」
悲しそうに言う。
（…やっぱり、それが嫌だったんだな…）
ユリは部長さんや、ちゃんとした入部希望の生徒に迷惑かけたくなかったのだ。だからさっさと退場したのだ。

中学校では、小学校の知り合いが多かったから抑えてくれていた。だけど、高校ではユリを知らない人間ばかり。
だから、ユリが嫌がることが何なのか、皆は知らない。
知らないから知ろうとして、ユリを悲しませる。

（多分、好きだって言われるのは、そんなに嫌いじゃないんだろうな…）
告白されて、何も思わないほど冷めた人間ではないと思う。
ただ、ユリを好きだと言った人が、ユリが嫌がることをするのが悲しいんだろう。

「何であんなことするのかな…」
「…大丈夫だって、あんなのすぐに終わるよ、絶対！」

「…そう思う？」
「思う思う！」
「…じゃあ、その言葉、少しだけ信じてあげるわ」
「…急に偉そうになったな」
「うるさい！」
歩く速度を上げ、先に立とうとするユリ。どうやらちょっとは調子が出てきたようだ。
…後で同中の奴らに頼んで、白鳥会の会則とか作ってもらわないとなー。

「あ、…ねえ、クロ」
「…何だよ？」
振り返ったユリが微笑む。
嬉しそうで、なのに少し寂しそうにも見える複雑な笑顔。
「クロは、よく知ってる相手なら好きになったことあるの？」

「…え、…っと…」
俺の頭が真っ白になって、何も答えられない。
「変な顔ね…相変わらず」
そんな俺を酷評すると、ユリはまた歩き出した。

「……はそんな……も…きだけどね…」
風のいたずらで、何か聞こえた気がした。

第四話：きっかけ

一週間経過。

俺とユリとトウカは相変わらずだった。
だけど、俺的には大事件が起こった。

「…は？」
「いや～、悪いな黒井。はっはっはっは！」
放課後の教室。ユリは部活に行き、俺は大介と話をしていたのだが。
大介は笑っていた。嬉しそうに。
いや、実際にすごく嬉しいのだろう。

「白鳥さんのメアドだぜ？　うらやましいだろ？」

そう言って、自分の携帯を見せつける大介。さっきからずっとこの調子だ。

「…は？」

そして、俺もずっとこんな調子だ。

「……黒井。あの、大丈夫か？　なんかさっきから反応鈍いし、目が虚ろだぞ？」
「え？　…あ、ああ、大丈夫大丈夫。それより、もう一度詳しく教えてくれ。どこでその情報を入手したって？　いくらで買ったんだ？」
「買ってない！　本人から教えてもらったんだよ。彼女に告白した時に」

『彼女に告白した時に』
『カノジョニコクハクシタトキニ』
『カノジョ』
「カ、ノ、ジ、ョ…？」

「おいおい、本当に平気か？　小さいヨなんてまともな人間なら発音できないぞ？」
心配そうに覗き込む大介だが、そんな小さなことは放っておいて、説明を求めた。

【大介の説明による、当日の状況】
1　大介の告白
『白鳥優里さん、好きです！　友達になってください！』
2　ユリの返事
『え、えっと…、時々、メールするくらいなら…』
3　大介、感動
『あ、ありがとうございあああ！』
『…あの、泣かないでください…』
4　メアドの交換

「…そうか…」
詳しい説明を聞いて安心したが、やっぱり、ショックだった。
まさか、ユリが告白してきた相手とメアドを交換するなんて…！
普段なら、そういうこともすっぱりと断っているはずだ。
それに、ユリはメールをあまりしない。
俺やトウカにだって、何か用事があるときだけメールをする。

なのに、大介とメアドを交換した…！？
何故か天地が逆転して、大介の声が遠くから聞こえた。

「黒井！？　おい、くろ…い…ゆ…め…！？」
全てのものがスローに見えて、真っ暗になる。
大介、…俺を名前で呼ぶな。
※
気がつくと保健室だった。
保険の先生に
「昨日夜更かしして…」とか適当に言い訳すると、外はもう真っ暗だった。
大介は俺が起きるのを待つと言っていたらしいが、遅くなったので先生が先に帰したらしい。
一人でトボトボと歩いていると、校門のところに人影があった。
ユリだった。

「…待って、いたのか？」
妙に硬い声が出た。
「…うん」
ユリの声もいつもとは何か違うように思えた。
「突然倒れたって聞いたけど…、大丈夫なの？」
（聞いたって、誰から…？）
ユリの何気ないセリフに、妙に敏感になっている。
「大丈夫だよ！　いいから、さっさと帰ろう」
ユリの顔がまともに見れなくて、俺は歩き出した。
「…」
ユリは黙って後を歩く。
結局、帰り道では何も話さなかった。

※

俺の部屋からは、ユリとトウカの両方の部屋の灯りが見える。
カーテンは閉まっているので中の様子はわからないが、二人とも起きていた。
（ユリは今、大介とメールしているんだろうか…）
別に友達とメールくらい普通なのに、ユリがそうしていると思うと苦しい。

※

その夜も、その次の夜も、さらにその次の夜も、俺はよく眠れなかった。
学校が終わるとすぐに自分の部屋に戻って、ベッドに倒れこむ。
俺の家の鍵を持っている、トウカやユリが様子を見に来たようだったけど、俺にはそれが願望（ユメ）か現実かもよくわからなかった…。

そんな毎日が続いた。
大介は未だにユリとメールが続いているらしく、学校でも嬉しそうな顔でよく携帯を見つめていた。

ユリとはあの夜以来、あまり話をしていいない。トウカとも。
一緒に三人で登校していたが、俺はずっと黙っていた。

何かを考えるのが面倒で、とても眠かった。
まさに、今のように。

※

…電車に乗っていた。寝坊ギリギリに起きるので、満員電車での通

学が普通になった。
まるで習性のようにユリを壁に立たせ、俺は腕をつっぱる。ユリはいつものように俺に背中を向けて立っている。
だけど、この日はいつもより混んでいたのか、あるいは寝不足が続いて力が出なかったのか。
後ろからの圧力に負けてしまった。
俺の体がユリにぶつかる。
「…きゃっ…！」
ユリが驚いて声を出すが、どうしても離れることができなかった。
なんとかしようと足掻くが、疲労が増すだけ。身動きすらろくにできない。動くのは両手くらいか。

…疲労と寝不足と、ついでに人の熱で蒸す電車の中。もやがかかったような頭の中で、ユリの小さな背中と、懐かしいユリの香りだけが鮮明に感じられた。
いつの間にか、俺はユリを抱きしめていた。
とても温かかった。

※

『次は～、～。』
…どれくらいそうしていたのだろうか。
降りる駅の一つ手前で、ようやく脳が復活した。
「ご、ごめん！」
慌てて手を離すけど、ユリの反応が無い。
（すごく怒っているのかな…。…もしかしたら、痴漢だと突き出すのかも…？）
怒り狂うユリの姿を想像して青ざめたが、次のユリの言葉に心底仰天した。

「…混んでたから、許してあげる…」

背中を向かれたまま、周りに聞こえないようにボソボソと囁かれた。ユリの横顔を覗き見ると、耳まで真っ赤で、とても恥ずかしかっただろうに、一言も文句を言わなかった。

第五話：メール…？

『…進行方向、右手側のドアが開きま～す』

停車のアナウンスに、ハッとする。

「…降ります、降ります！　通してください！」

ユリの手をとり、慌てて電車から降りた。

「…ばか」

俺の手を振り払って、ユリは何事もなかったように歩きだした。

でも、頬はまだ赤くて、ちょっとふらついている。

（もともと色白で歩き方が綺麗なユリだから、ちょっとの違いでも違和感があるなー）

なんとなく勘が働いて、少しだけ間を空けてからユリの後をついていく。

ユリも俺も目的地は高校だ。同じ道をあるいて当然なのだから、まさかユリの尾行をしているなんて誰も思わない。

前を向くフリをしてユリを見ていると、駅を出てすぐに友達らしき女生徒が近寄っていった。

「おはようございます、白鳥様」

「…お早う」

「あの、お顔が赤いようなのですが、どこか具合が悪いのですか？」

「えっ、…これは…、その…。…だ、大丈夫、よ…」

友達に聞かれ、慌てて誤魔化すユリ。

「ですが…」

「いいから！」

「…ぷっ」

慌てふためく姿が面白過ぎて、つい噴出してしまった。

ユリが怒っているオーラを身に纏い始めた気がするが、それすらもおかしくて笑いが止まらない。

（…そういえば、久しぶりに笑ったな）

ふと空を見上げると、入学式の朝を思い出すような青い空が広がっていた。

※

学校についたのだが、体がポカポカしているような気がする。
いや…気力がみなぎっている、と言った方がいいだろうか？
とにかく、昨日までの無気力さがナリを潜めていた。
ユリのことを思うと胸が痛かったのに、逆に力が湧いてくのだ。

（…今しかない！）

大介と顔をあわせてすぐ、ずっと目を逸らし続けていたことを聞いた。

「あのさ、大介ってユリ…、白鳥さんとどんなメールしてんの？」

「おお！　黒井も俺と白鳥さんの愛の軌跡が知りたいのか？」
「…愛とか言うな」
「なあに、遠慮するな友よ！」
そう言って、実際に携帯を開いてくれた。
（…ユリが書いたメールを、勝手に見せていいのか？）
ちょっと疑問に思ったが、大介は気にしていないし、俺も気になったので読ませてもらった。

『面白かった』
『ありがとう』

「これが昨晩もらったメールだ！」
自慢するように見せびらかす大介。
「…いや、他のメールとかないの？　全く話が見えないんだけど」
当然のことを尋ねた俺に、大介はきっぱり言う。
「ない！」
「…はあ？」
「…実は、俺は学校であったことを色々と書いてメールをしているんだ。何回かメール送ったが、そういう話が好きらしい」
「…そうなんだ」
「で、白鳥さんからのメールはだいたいこんな感じで、一日に二、三通くらいしか来ない」
なんだそれ。
「…そんなメールで嬉しいのか？」
「もちろん！　だって白鳥さんがメールくれるんだぜ」
笑顔で即答する大介。
確かに、それだけで自慢に値するかもしれないけど…。
…ここ最近の寝不足の原因は、意外と根が浅かった…。

第六話：狸寝入り

朝の一件ですっかり気が抜けた俺は、寄り道もせずにまっすぐ帰宅して、制服を着替えベッドでゴロゴロしていた。
（あー、そういえば夕飯の材料買わないと…）
作る気力も買う気力もなくてずっとコーンフレークだったが、それもついに尽きた。
（面倒だなー、出来合いで買ってくればいいか。…それすらも面倒くさいな）
ベッドの魔力から抜けられなかった。
夕飯を抜こうかと真剣に考えはじめた時、玄関のドアが開く音が聞こえた。

『クロちゃ～ん！　起きてる～！？』

声だけでわかる。

トウカだ。

そのまま足音が階段を上がり、俺の部屋に向かってくる。
それを聞いて、なぜかとっさに寝たフリをしてしまった。

ガチャ

「もう、また寝てるの？」

俺を見て、呆れたように言うトウカ。
そのままベッド横の床に座る。
仰向けに横になっている俺の右側だ。

「トウカちゃんが来てあげましたよー」

ゆさゆさ

腕をのばして軽く揺する。

（そんなんじゃ、本当に寝ていても起きないだろ…）

そう思ってしまうような揺らし方。

それで起きたフリをしてもよかったのだが、何となくトウカの顔を見るのを躊躇ってしまう。

（しばらく、まともに話をしていなかったからかな…）

毎朝話しかけてきてくれたのに、適当な態度で相手していた気がする…、というか実際にはろくに返事すらしていない。

どんな顔をすればいいのか決心がつかなかった。

ゆさゆさゆさゆさ……。

「起きないなー。……このまま寝ていると、いたずらしちゃうよ？」

（なにぃ！？）

……ちょっと興味が出てきたな。しばらく様子を見てみよう。

「んしょ、っと…」

ベッドに腰掛、覆いかぶさるような体勢になる。

「起きないとぉ……、キスしちゃうよ？」

（な、なんだって！）

ドキドキしながら待つ。

「……起きない、ね？」

トウカの顔が近づいてくるのがわかる。
吐息が頬に触れて……。

ちゅっ

そのまま、頬にキスされた。

（……ですよねー……）

がっくりとくる俺。
だが、トウカの言葉には続きがあった。

「やっぱり、初めては好きな人からキスしてほしいから…、今度してね♪」

※

そのあと、またゆすり攻撃が再開された。
だが、気恥ずかしくて起きられない。

「クロちゃん…」

突然、トウカが揺らすのを止めた。

「…さびしいよお…」

急に悲しそうな声を出すトウカ。

「ねえ、クロちゃん…。最近お話してくれないの、疲れているからだよね？　トウカのこと、…嫌いになったんじゃないよね…？」

（な、何を急に！？）

突然のトウカの言葉に心の底から驚いた。

トウカを嫌いになるなんて、考えたこともない。

だが、俺の胸中に気づかずにトウカは不安そうに言う。

「…ウウッ…。クロちゃん。…こんなのっ！　……こんなの、いやだよぅ……」

徐々に嗚咽が混じっていく…

「クロちゃんが元気になるならトウカが何でもしてあげるよ。……だから…目を開けてよ…。…グスッ…トウカのこと…見てよ…！」

俺の手を胸に抱き、トウカは静かに泣き始めた…。

※

（ああ、そうか…）

俺はようやくわかった。どうしてトウカと顔をあわせたくなかったのか。

（…ユリを抱き締めたから、後ろめたかったんだ…）

トウカは、俺を真っ直ぐに慕ってくれるから。

そして、俺もそんなトウカが好きだから。

…だから、俺はトウカに真っ直ぐ向き合うことができなかった。
ずっと逃げてばっかりで、その結果トウカを泣かせてしまった。
（…俺って本気で駄目な奴だ…）
ユリにばかと言われて当然だ。
本当に馬鹿だったんだから。
※
ユリとトウカ。
生まれた時から知っている、何よりも大切な二人。
俺にはどっちが好きかは分からない。
どうすれば、その答えが分かるのかも分からない。
でも。
俺は二人が好きだということなら、はっきり分かる。
だから、今やることは一つしかなかった。
（いつまでも、好きな女の子を泣かせてなんかいられない！）
胸の内の熱い想いに命じられるまま、身を起こそうとして。
ふにゅっ
「あ」

トウカに抱かかえられていた手が、ふいに胸に触れた。

「ひゃあああ――――！？」

ガリッ

「痛っ、てえーーー！！」

突然の刺激に驚いたトウカに、思いっきり爪をたてられた。
右手を抱えて飛び起きる俺。
何というか、…とてもかっこ悪い。

（ああ、俺って本当に…）

内心、ひどく落ち込んだ。

第七話：傷

「…ク、クロちゃん…」
「トウカ…」
「…」
「…」
「…！　血、血が出てる！」
「え…」
お互いに何も言えずにいると、トウカが慌てた声をあげた。
右手に目をやると、トウカの引っかいたところが四本の赤い筋になっており、そのうちの三本から血が滲んでいた。
「ごめん…ごめんなさい…ふえ…」
驚きで止まっていた涙が、またトウカの目に浮かぶ。俺は無理やり笑顔をつくった。
「大丈夫だって！　こんなのかすり傷だから舐めとけば治るよ！」
「…舐めとけば…？」
俺の言葉にトウカが不思議そうな顔をする。
「…わかった」
「ト、トウカ！？」
トウカが俺の手を舐め始めた。

「…んん……あむ…」

濡れた舌の感触…。
傷口に走るわずかな痛み…。
俺の手を舐めるトウカの、涙が浮かんだ顔…。
目の前で起こっているのに、現実とは思えない。

※

俺は左手を動かし、トウカの肩にまわした。
その時、少し歯が食い込んだが気にせず耳元に顔を寄せる。

「トウカ…」
「！」

それだけで感じたように、身震いをした。

「もう…血、止まったみたいだよ」

手から滲んでいた血はきれいに拭われていた。
俺の言葉に一瞬躊躇したが、素直に口を放すトウカ。
俺の左手は動かない。
二人の距離は離れない。

「トウカ…こっちを向いて…」

トウカは恐る恐る顔を動かし、恥ずかしそうに目をつぶった。口元が軽く突き出されるような形で。
俺もゆっくりと顔を近づけていく。
お互いの吐息が重なって…。

※

ピンポーン

ガンッ！

「いっ…！」
「いにゃああ！？」
俺とトウカの額が盛大な音を立ててぶつかった。トウカが寝ている所をひっぱたかれた猫みたいな声を出した。
「クロー！　冬歌ー！　居るんでしょ？　ご飯できたわよ」
「ユ、ユリ！？」
「お姉ちゃん！？」
玄関からユリの声が聞こえた。
「そ、そうだクロちゃん！　お母さんが、今日ウチでご飯食べていきなさいって言ってたの！」
「あ、ああ。了解！」
「……じゃあ、わたし先に帰るね！」
それだけ言ってトウカは飛び出していった。
制服の上の部分を持っていくのも忘れない。

バタバタバタ…

「あ、冬歌。クロは？」
「上！　さっき起こしたからすぐ来るよ！」
「…？　なんでそんなに慌てて…」
「お、おなか空いたの！」

冬歌の声が慌ただしく遠ざかっていった。
そして、下でユリが待っているとわかっているのだが、俺はすぐには動けなかった。
薄いジャージに出来たテントが、なかなか静まらなかったからだ…。

※

ジーンズに履き替えてから下に降りる。
玄関では制服姿のまま、足元に鞄を置いたユリが待っていた。
「あれ？　まだ家に帰ってないの？」
「…帰ってくる途中で、お母さんからメールもらったのよ」
イライラしている声だった。
「…支度が遅くなってすみません」
「別に怒ってないわ。クロがノロマだなんて昔から知ってるから」
「…そうですね」
明らかに怒っていた。
「…クロ。そのケガ、どうしたの？」
「あー。…ちょっと引っかけて、その…ムニャムニャ…」
目ざとく見つけられ、困ってしまった。
不審そうに見られたが、トウカの胸を揉んで引っかかれた、なんて言えやしない。
「…まあいいわ、消毒はしたの？」
「…えー、そのー」
「し・た・の？」
「…しました」
トウカの舌で。
「ちょっと見せなさい。…血は止まっているみたいね、じゃあ…」

ガサゴソ…

自分の鞄をあさるユリ。
「あ、あったあった」
その手にはバンソーコーが握られていた。

※

「…はい、これでいいわ」
ユリの手で貼られた3つのバンソーコー。
「…黒猫…」
「文句あるの？」
「…いえ、全く」
（ただ、可愛い趣味だなー、と）
猫を選ぶ辺りが、ユリらしいけど。
「…いいから行くわよ！」

こうして、俺は隣の晩御飯をいただくことになった。

第八話：覚えておきなさい

夕食の席でトウカと顔をあわせた。
だが、トウカは何も言わずにご飯をかき込むと、一目散に部屋に逃げていった。
一緒に食卓を囲むユリとおばさんが不思議そうな顔をする。
「ねえ、クロ」
「…何？」
「トウカ、変じゃない？」
「ソウデスネ」
「…クロも変ね」
「ソウデスネ」
「…後で、私の部屋に来なさい」
「…ワカリマシタ」
自分の食器を下げて、ユリも部屋に戻っていく。
「…はあ」
溜め息が出た。
「うふふ…」
「…何です？」
笑い声に顔を上げると、おばさんが笑っていた。ちなみにおじさんはまだ帰っていない。残業で遅いそうだ。
「今日はいつもと逆なのね」
「…そうですね」
いつもならユリが先に部屋に戻り、トウカに引きずられているはずだ。
「あの子たちと何かあったのかしら？」
「……」
答えられなかった。
朝から色々とあったけど、到底言える内容ではない。

…それだけではなく、二人と俺だけの秘密にしておきたいとも思った。
「あらあら、おばさんには教えてくれないのね。悲しいわ」
全然悲しそうには見えなかった。
「すみません」
「いいわ。…でも、これからも二人のことよろしくね？」
「…は、はい…！」

ニッコリと微笑むおばさんの笑顔に、妙な迫力を感じた。

※

コンコン

「入って」
誰とも聞かず、ユリが入室を許可する。
ユリはベッドに腰掛けていた。
俺を見て、床を指差し言う。

「座りなさい」
正座をさせられた。

「で、トウカのことだけど…」
俺を見下し冷たく言う。
「何したの？」
「…やったことは確定なのか…」
「いいからさっさと言いなさい」
「……」
実際に原因が俺なので、反論できない。
だが。

「…黙秘権を行使します」
俺は黙った。
詳しい状況を説明するとなると、トウカのしたことも含めて言わないといけなくなる。
それはしたくなかった。
ユリとトウカは仲の良い姉妹だが、だからこそ知られたくないこともあるだろう。
「…私は、あの子の姉よ？」
睨まれて肝が縮む思いだったが、俺も負けじと睨み返す。
「…トウカに頼まれたわけじゃないだろ」
「…」
「…」
静かな争い。
先に目を逸らしたのはユリだった。
「…わかった。クロのこと信じてあげる」
少し悲しそうに、ユリは言った。

※

話が終わったと思い、俺は立ち上がり扉に手をかけた。
「…トウカの様子見て行きなさいよ」
不機嫌そうなユリの声。
「わかってる」
「…あと…」
物音がした。
「！？」
振り返ろうとしたところで、背後からユリに抱きしめられた。
「…朝の…アレ…」

耳元で囁く。
アレ、と言われて固まってしまった。
まさか、今その話を持ち出されるとは！？

「…クロのいたずら、私は昔からよくされて慣れているから…」

そこで、言葉が止まった。
（慣れているから…？）
次に、どんな言葉が続くのか。
息をのんで待つ俺の耳に、消え入りそうなユリの声が届く。

「…ああいうことされて…、…許してあげるのは私だけだって覚えておきなさい…」

第九話：もう一つの質問

そのまま部屋を追い出された。
今さらながら、心臓がバクバクと暴れ出す。
（公認？　公認ということか？）
ユリの言葉の意味を考える。
だが、明確すぎて間違えようがない。

（朝のアレを、ユリにならやってかまわない…）
おそらく…その先も…。

※

…思わぬ口撃にかなり心乱されたが。
気を改めて、トウカの部屋のドアをノックする。

コンコン

「…クロちゃん？」
返事がすぐに返ってきた。声が沈んでいる。
「そう、俺」
「入っていいよ」
「…お邪魔しまーす」
部屋の中は暗かった。電気がついていない。
トウカは布団にくるまりミノムシになっていた。
「…横、座るよ」
ベッドに腰掛ける。
すると、トウカがボソボソと何か言った。
「ん？　何か言った？」

「…クロちゃん、ごめんなさい…」
「え、何が？」
突然謝られて驚く。何かされただろうか。
「…手、引っかいちゃって…」
「あ…、なんだ。大丈夫だよ。全然平気」
（トウカに消毒してもらったしなー）
なるべく明るい感じで言うが、トウカは沈んだままだった。
「…それに、寝ているところを起こしちゃったし…」
「え。…ゼンゼン、キニシテナイヨ」
（…もしかして、手を引っかかれたから起きたと思っているのか…？）
バレてなかったと知って、とても複雑な心境だ。
（あ、そうだ）
トウカに大事なことを伝えていなかった。
「トウカ」
「…なに？」
妙にオドオドしているトウカ。
「…大事な話があるんだけど」
俺は精一杯の勇気を出した。

「…聞きたくない！」
一蹴された。

「…え、何で？」
「何でも！」
布団の端を持って小さくなるトウカ。
「いや、本当に大事な…」
「嫌なの！　…言わなくても分かるけど、クロちゃんの口から聞きたくないの！」
「え、マジ？　…何で聞きたくないの？」

（トウカのことを大事に想っているって、言いたいだけなのに）
もしかして嫌われてるのだろうか、とか思ってしまう。
だが、昼間のトウカ姿を思い出し、そんな不安は打ち消す。
「トウカ、何か勘違いしてないか？」
なるべく、何事もないように話しかける。
「勘違い…？」
ミノから目だけを出して、トウカが不安そうに聞いてきた。
「だって…、クロちゃんはお姉ちゃんが好きって話でしょう？」
「な、何だそれ！？」
…常々、トウカの言うことは俺の想像を超えている。

※

「ち、違うの…？」
「えーっと…何でそう考えたの？」
「…だって、クロちゃんがトウカの部屋に来てくれなかったんだもん…」
トウカが消え入りそうな声で答える。
「？　来てるけど？」
「…トウカの部屋を通り過ぎて、先にお姉ちゃんの部屋に入った…。…いつもそんなことしないのに」
（そんな理由で…）
呆気にとられる。
「…クロちゃんが来ないから、お話しているんだなって。…クロちゃんはわたしよりお姉ちゃんが好きになったんだって、不安になっちゃたんだもん…」
布団の奥、涙声で言うトウカ。
昔から、トウカは思い込みが激しいところがある。

だが、全くの事実無根というわけでもなく、勘が鋭いと思う場合もあった。今のように。
「あれは、ちょっと呼ばれただけで、別にその…」
部屋の中でユリに言われたことを思い出し、つい語尾を濁してしまった。
「それで、クロちゃんが大事な話って言うから…」
「俺はユリのことが好きだって、言うと思ったの？」
「…うん」
「違います」
「…よかったあ」
ようやく自分が勘違いしていたとわかったのか、布団から顔を出して嬉しそうに微笑む。
「まったく、急に何突拍子もないこと言うと思ったら…」
「あう～、ごめんなさ～い。…でも、それなら、何の話なの？」
「あ。…う、うん」
真っ直に見つめられ、改めて聞かれるとすごく緊張する。
だが、俺ははっきりと言った。

「俺はトウカのこと、…すごく大事な女の子だって、思っているよ」

「…！　…クロちゃん…」
驚いたトウカの顔に、ちょっと嬉しくなった。
ミノムシの上からだけど、背後からトウカの体を抱きしめた。
「…クロちゃん…、トウカのこと…嫌いじゃないの？」
「うん」
「しばらく冷たかったの、疲れていたから？」
「…うん、ごめんな」
謝るべきなのは俺のほうだった。
謝罪の意を込めて、もう少し強めに抱きしめる。
「にゃう！　く、くるしいよ～クロちゃん～」

腕の中でトウカが苦しげな声をあげる。
「…ごめん」
また失敗してしまった。
「ううん、いいの。すごく嬉しいから」
「…そう言ってもらえて、俺も嬉しいよ」
「えへへ～」
さっきまでの暗い顔はどこへ行ったのか、蕩けそうな笑顔を見せるトウカ。
…可愛い。思いっきり抱きしめたいが、我慢、我慢。
「ねえ、クロちゃん」
「ん？」
「お姉ちゃんと私、どっちが大事？」
※
「…っ！」
究極の質問に、言葉が出ない。
「そ、それは…、えーっと…」
「…答えられないなら、別にいいよ」
トウカがミノの中に引っ込む。
「いや！　そ、そのな…」
「…難しかった？　じゃあ、さ…」
慌てる俺にトウカが言う。
別の質問に答えてくれたら、さっきの質問はなかったことにしてあげる、と。
俺は一も二もなく了承した。
…ミノから出てきたトウカは、小悪魔のような笑みを浮かべていた。
「…クロちゃんは、私とお姉ちゃん、どっちが好き？」

「…な…！」

（ほとんど同じじゃないか…）

そう思いつつも、さっきの質問とこの質問は全く別だと分かってしまった。

幼なじみとして大事かどうかではなく、男女としてどちらを好きか聞かれているのだと…。

「…俺は…」

第十話：本当の気持ち

『…クロちゃんは、私とお姉ちゃん、どっちが好き？』

目を瞑る。

※

ユリの姿が浮かんだ。

スラリと美しく立つユリ。
背筋を伸ばし、颯爽と歩くユリ。
不機嫌そうなユリ。
睨み付けるユリ。
…俺の腕の中で、真っ赤になって震えるユリ。

『…許してあげるのは私だけだって覚えておきなさい…』

ユリの全てが、愛しい。

※

だけど、トウカの姿も浮かんだ。

幸せそうに微笑むトウカ。
無邪気に甘えてくるトウカ。
小悪魔のような笑みを浮かべるトウカ。
悲しそうに俯くトウカ。
…嫌いにならないでと、涙を流すトウカ。

『…クロちゃんが元気になるならトウカが何でもしてあげるよ…』
トウカを決して失いたくない。
※
「…俺は…、二人とも好きだよ」
初めてはっきりと言葉にした。
それが、俺の本当の気持ちだった。
※
「そう、なんだ…」
背後から抱きしめた格好のままだったが、トウカは布団の中に引っ込んでしまった。
（怒ったかな？）
不安になったが、一度口から出た言葉を取り消すことなんて出来ない。
それに、さっきの言葉が俺の本心である以上、取り消す気もなかった。
それで怒られたり、呆れられたりしてもしょうがない。
…でも。
（虫のいい話とは思うけど、決められるまで待っていて欲しい…）
図々しすぎてここまでは言えなかったが、俺はそう思っている。

「…クロちゃん…」
布団の横からトウカの手だけが出てきて、おいでおいで、と手招きをした。
（な…、何だ？）
一瞬躊躇するが、指示に従い俺も横に移動する。

「クロちゃ～ん♪」
バフッ！

「うわっ！？」
突然布団がめくりあがり、トウカに抱きつかれた。
すりすりすり…、と俺のお腹に頭をくっつけて甘えてくる。
「ト、トウカ…？　急に何を…」
「んみゅ～～♪」
俺の言葉が聞こえているのかいないのか、とにかくご機嫌な様子。
（あ、トウカの匂いがする…）
甘い香りがして、つい反応しそうになってしまう。
そんな俺に気づかずにトウカは体を起こし、俺の首に手を回して、しだれかかるように密着してくる。

「クロちゃん、トウカね、今、すっごく嬉しいの！」
興奮に頬を染めて、トウカが言う。キラキラした瞳が俺の目の前にくる。

「今まで、ず～～～～～～～～～～～～っと、クロちゃんに言って欲しかったのに、いつも『嫌いじゃない』とか『大事に思う』とか、そんな言葉ばっかりで、ようやく『好き』言ってもらえて、」

一旦言葉を区切り、トウカが大きく息を吸う。

「本当に！　すっっっ、ごく！！　嬉しいんだよ！！！！」

家中にトウカの喜びの叫びが響いた…。

※

「何してるの？」

膝の上にトウカを乗せて、真正面から抱き合ったままの俺たちに、冷たい声が浴びせられた。

「ユ、ユリ…」

ドアのところに、ユリが立っていた。

「…仲が良くていいわね」

無表情のまま、平坦な声で言う。

（ブ、ブチギレている…）

長いつき合いだが、ここまでキレているユリなど数えるほどしか見たことがない。

それほどの怒り。

「あ、お姉ちゃん♪」

だが、トウカはそんなユリの様子に気づかないようだった。

「聞いて聞いて！　クロちゃんがね、トウカのこと好きって言ってくれたの！」

「…あら。…羨ましいわぁ…」

（…終わった）

ユリの瞳に、冷たい光が宿ったのを俺は見た。

俺は死を覚悟した。

だが！

「んふふ～、お姉ちゃん、焼きもち～？」

「な！　べ、別に…」

「安心していいよ～」

「…別になんとも思って無いってば！　……安心って、何よ？」

トウカがそんなユリを突くと、怒りの仮面がほつれ出した。

（こ、これは生還フラグか！？　トウカが何か起死回生の手を…！？）

一瞬だけ、希望を抱いてしまった愚かな俺。

「クロちゃんね、わたしとお姉ちゃん、どっちも好きなんだって！」

「……」

「……」

言葉を失くす俺とユリ。冷たい視線が俺を射る。

（恥ずかしすぎて、…死ねる…！）

死因、恥死（ちし）。世界で一番嫌な死に方だ。

あわあわあわと、意味もなく手を動かしてしまう俺。

「…あ、あの、その…」

何か言わなければと思うが、何も思いつかなかった。

「……か…」

そんな俺を見つめて、ユリが何を言った気がした。

※

「クロ」
「…はい」
「今日はもう帰りなさい」
「…はい」
「えー！」
トウカが残念そうな声を出すが、俺はトウカを膝から下ろして立ち上がった。
「詳しい話は、明日聞くから」
「…了解です」
どうやら刑の執行は一日遅れただけのようだ。
「む～。…あ、クロちゃん」
トウカが何かを思い出したような声を出した。そのまま、俺の耳を引っ張る。
「あのね…」
ユリに聞こえないように、小声で囁かれる。
「…疲れているなら、いっぱいお昼寝したら……元気出ると思うよ♪」
それだけ言って、また布団に飛び込んでしまう。俺は唖然とした顔でトウカを見た。
「…」
視線を感じて振り向くと、そんなトウカと俺を、ユリが不機嫌そうに睨んでいた。
その顔を見て、何となくいたずらしたくなる。
「…おやすみ」
「！」
「あ～！」

正面から力一杯抱きしめてやってから、俺は一目散に逃げ出した。

「ま、待ちなさいクロ！」

「ずる～い！」

二人の怒りの声を、聞こえないフリでやり過ごす。

（ああ、ついやっちまった…）

明日、二人と顔を会わすのが怖い。

※

部屋に戻り、ベッドに倒れこむ。

色々とあったが、何とか一日が終わった。

俺と、ユリと、トウカ。

三人の関係が、少しだけ変わった最初の一日。

恋人になったわけではないけど、幼なじみからちょっとだけ抜け出した一日だった。

（…朝になったらユリとトウカの機嫌とって、電車ではユリと…、放課後は…多分、トウカが来るんだろうな…）

明日からの毎日を想像し、どんなことが待ってるかと思うとドキドキした。

（ああ、今日寝れるかな…？）

そう思ったが、いろいろあってやはり疲れていたのだろう。

俺は眠りの海へと沈んでいった。

（あ、飯買ってくんの忘れた…）

第十話：本当の気持ち（後書き）

とりあえず一段落です。

１２月の暮れからの連載でしたが、のべ４千人以上の方に読んでいただき、たいへん嬉しく思います。

毎日たくさんのアクセス、本当にありがとうございました！

このまま続けたいのですが、正月が忙しくて少し連載を休みます。

一週間以内には再開する予定です。

なるべく用事をすませるつもりですので、２００９年もよろしくお願いいたします。

では、みなさん、よいお年を！！

第１１話：置いてけぼり（前書き）

お待たせしました。
一週間ぶりの更新です。

第11話：置いてけぼり

翌朝。
「え、先に行った？」
「うん。だから、今日は2人っきりだよ♪」
嬉しそうに腕を絡めてくるトウカ。
「…やっぱり、昨日のことのせいで怒ったのかな」
「さあ？」
「…うーん…」
「もう！　こんなに可愛い女の子と一緒にいるのに、他の女の子のこと考えるの禁止！」
ほっぺを膨らませてトウカが怒る。
「他の女って…ユリじゃないか」
「むしろ、お姉ちゃんだからダメ！　トウカのライバルだもん」
「…わかりましたよー」
ぷくぷくほっぺを指で潰す。
「わかればよろしい♪」
「いやはや、お姫様のワガママにはかないませんな」
「…クロちゃんは学校に行けばお姉ちゃんと会えるんだから、今はトウカを構うべきなの！」
笑ったと思ったらすぐに不機嫌に。ゴロゴロと表情が変わって飽きない。だから、ついからかってしまいたくなる。
「はい、仰せのままに…」
「反省の色がないよ！」
そんな感じで家を出た。

※

初めて一人で電車に乗って、満員電車の苦しみを改めて理解した。

（…そう言えば、中学の時もこんなことあったなー）

しばらく、ユリがまともに顔をあわせてくれなかった時期。
学校でも、家でも。
…寂しいな。

※

「おう、お早う！　どうした、元気がないな」
「…お早う。いや、ちょっとね…」
「まったく、昨日の今日でえらくテンション低いな！」
「…そういうお前は、妙にテンション高いな」
「もちろんさ！　…アレを見てみろ…」
「……アレ？」
「…白鳥様に決まってんだろ。いいか、ソッとだぞ、ソッと。壊れ物を扱うみたいに」
「…どんな見方だよ…」
一応つっこんだが、ニュアンスは伝わったので、横目でユリの様子をうかがう。
アンニュイに窓の外を眺める姿が、まさに芸術だった。

「…よくわかった」
「目の保養だよ」
大介が満足げに頷く。そういえば、今日はユリの周囲に人がいない。
教室の中を見渡すと、全員が距離を置いてユリに見ほれていた。
「…はぁ…」
ユリの態度と教室の様子に、一気に気力を持って行かれた。

※

昼休み。
飯を買いに行こうとして携帯が鳴った。
メールを受信。
差出人はユリだった。

『すぐに屋上に来なさい』

俺は慌てて屋上に向かって駆け出した。

どうやら、ようやく昨日の話をするようだ…。

第１１話：置いてけぼり（後書き）

本編と関係ない話ですが、なんか就職厳しいらしいですね。
胃が痛いです。

実は魔法学校が舞台のハーレムっぽい話が読みたいから、書こうか悩み中です。
先にこっち終わらせろって話ですよね。

そんなわけで、グダグダな後書きですが連載再開です。
今年もユリ・トウカ（ついでにクロ）共々、どうぞよろしくお願いします。

第１２話：えええ～～～！？

屋上に続くドアの前まで来て、途方に暮れてしまった。

（…そういえば屋上って、どっちの校舎の屋上だ？　それに、ドアに鍵かかっているし…）

うちの高校は二つの校舎が二本の廊下で繋がっていて、教室がある校舎を南校舎、特別教室や職員室などがある方を北校舎と呼んでいる。

南校舎の隣にはグラウンドや体育館・プールがあり、北校舎の周囲には食堂やホールがあった。

校舎の間は中庭として木やベンチが置かれている。

とりあえず、教室から飛び出して、真上である南校舎の屋上へ駆け上ったのだが、先ほど言ったようにドアの鍵はかかったまま。

（…ユリが後から来るのか？…でも、先に教室を出たし、文面では今も待っている、って感じだよな…）

俺に一瞥もせず教室を出て行ったユリ。

窓から北校舎の屋上を見る。

二つの校舎は同じくらいの高さなので、屋上もよく見えたが、そこに人影はなかった。

（実は鍵は開いていた、とかそんなオチ？）

試しにガチャガチャやってみる。

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ…

無理です。無理でした。

（…電話するか）
携帯を取りだそうとした俺の耳に、聞き慣れた声が飛び込んできた。
「…クロ、いるの…？」
ユリの声は、ドアの向こう側から聞こえた。
※
「お、おう！　俺だ！」
返事をすると、シリンダーが回る音がして鍵が開いた。
屋上へと続く分厚く重いドアを押し開くと、不機嫌そうユリがいた。
「遅い！」
…なんと理不尽な。
※
ユリは一言文句を言った後、ろくに俺の顔も見ない。
「…こっちに来なさい！」
移動した先は、北校舎の屋上からちょうど死角になる物陰。
そこに座らされ、ユリも隣に腰を下ろした。
「…で、昨日のことなんだけど…」
早速本題に入った。
ユリは嫌いなものから食べるタイプなのだ。
「…トウカに、何を言ったの？」

その質問に、俺は空を見上げた。

（ふっ。…深い色をした、美しい青だな…）

宇宙（そら）へと続く、はるかな蒼。

（…こんな場所で、昨日と同じセリフを言え、と？）

周りに誰もいない、見られる心配もないが、燦々と輝く太陽が俺たちを暖かく見守っている。

…恥ずかしい。とてつもなく恥ずかしい。

（…ああ、どうしてボクには翼がな…）

「クロ、早く言いなさい」

「…はい」

現実逃避は失敗した。

俺は、元気いっぱいに輝く太陽の下で、昨日と同じセリフを言った。

「俺は二人とも好きだよ」

恥ずかし過ぎて、まともにユリが見れない。太陽を見上げて、ユリの言葉を待った。

「……」

なかなか口を開かないユリ。

あれっ？とか思ったところで、ようやくユリが口を開いた。

「…クロ…」
「な、なに…？」
ドキドキしながら、答えを待つ。
「…よく聞き取れなかったから、もう一回言って」
（えええ～～～！！！？？？）
…え、マジっすか？

第13話：見せられない

「言いなさい」

ユリが有無を言わさぬ圧力を発する。
未だに俺のことを見ず、体育座りみたいな形で膝を抱いて、足の間に頭をのせて抱え込んでいるような体勢で。

「…俺は、二人と好きだよ…」

羞恥心を抑え、何とか言葉にした。
だが。

「もう一度言って」

ふざけんな。

…その言葉が出かかったが、ユリの右手が俺の制服の裾を掴んで、弱弱しく掴んだ。

「…お願い…」

顔を上げないまま、ユリが、『お願い』をした。

「…俺は二人とも好きだよ」

ユリの右手を握る。
（…何か、恥ずかしさとかどうでも良くなってきた…）
もちろん恥ずかしいことに変わりはないのだが。

それ以上に…。

「あのね、クロ…」

「うん」

「…さ、最後が聞き取れなかったから、もう一度言ってほしい…」

ユリが可愛くて。

ただ純粋に、ユリに俺の気持ちを伝えたくて。

俺は言った。

「好きだよ」

※

俺の服を掴むユリの手が、硬く握られた。

でも、ユリは何も言わない。俺も何も言わずにユリの手を握った。

しばらくして。

「あのさ…」

「うん？」

ユリがようやく口を開いた。

「…お昼、まだだよね？」

（…なぜ、飯の話…）

他に言うことはないのだろうか…。

※

「クロ…？」

クイクイと裾を引っ張られる。

未だに俺のことを見ていないので、反応がなくて困ったのかもしれない。

「あ、うん、まだだけど」

俺は正直に答えた。

（食堂へ飯を買いに行こうとして、呼び出されたからな…）

もう人気商品は売り切れているだろう。朝飯を抜いたからすごい腹減っているんだが、どうしたものか…。

「あのさ、…お、お弁当作ったんだけど、食べる？」

「もちろん食べます！」

喜んでご馳走になった。

※

「…」

「…」

「…なあ、ユリ」

「！　…な、何？」

「…どうしてそっち向いてんの？」

ユリは俺に背を向けて食事していた。

さっきと同じように隣に座っているのだが、近くに置かれていた小さなバッグから二つお弁当箱を取り出し、俺の顔を見ないようにして渡した後、背を向けられたのだ。

「…わ、私の勝手よ」

「ふうん…」

（…そういえば、今日はユリとまともに顔を合わせていないな…）

なにやら、面白そうな予感がする。

俺は弁当箱を置いた。

コトン

「…ん？　クロ、何かした？」

置いた時に小さな音がしたので、ユリが尋ねてきた。

「ああ…、何かするよ」

ガバッ

「きゃああ！？」

背中から抱きしめる。

「クロ！？　は、離しなさい！」

弁当箱を落とさないように気をつけているのか、軽く体を揺するくらいしか出来ないユリ。

「こういうことしても、ユリなら許してくれるんでしょ？」

昨日言った言葉を持ち出してみる。

「…！　…今は、今はダメなの！」

珍しく、自分が言ったことなのにダメだと言う。
（いつならいいのか、興味はあるけど…）
それ以上に、何故今はダメなのかが気になる。
多分、ユリが俺を見ないことに関係しているんだろうけど。

「ん～。じゃあ、その弁当かして」
「…なんで？」
「嫌ならこのまま…」
「はい！」

素直に弁当箱を差し出された。

「ありがとう……よっ、と」
「きゃ！」

受け取った弁当箱を横に置くと、ユリを後ろに引き倒した。
俺が膝枕をするような格好になる。
で、上からマジマシとユリの顔を覗いてみた。

目の下に薄っすらとクマが出来ていた。

「ぷっ」
「……クロオオォォォォーーーーー！！！！！」
「…はっ！」

下から吹き上げてくる殺気に、俺は死を覚悟した。

（ああ…やはり昨夜思ったとおり、今日が俺の命日だったのか…）

そこで、俺の意識は途絶えた。

…自業自得だよな…。

ユリ：初めての気持ち（1）（前書き）

唐突ですが、番外編的過去話です。

ユリ：初めての気持ち（1）

小学校の高学年くらいから、男の子に呼び出されるようになった。

「好きです、つきあって下さい…！」

いつも、だいたい同じようなことを言われる。
今日の相手はバスケ部のエースで…、何て名前だったかな。
とにかく、背が高くて顔も良くて、勉強までできるらしい。
同じクラスの女の子達がよく騒いでいた。

（クロよりカッコイいかも…、でも、クロの方が優しそうかな）

真っ赤になって顔を下げる、なんとか君を見ながらそう思った。
私の答えはいつも同じ。

「…気持ちは嬉しいけど、ごめんなさい」

私の一言で微妙な空気になってしまい、この場所から逃げたくなる。
さっさときびすを返そうとするのだが、なんとか君が私に質問してきた。

「…何でですか？　白鳥さんは今、好きな人がいるんですか？」

ちょっと女々しいと思ったが、これも何回か聞かれたことがある。
だから、私は答えた。

「…いないわ。そういうの興味ないの」

がっくりと落ち込むなんとか君。
話は終わったみたいだから、自分の教室に戻った。
※
「白鳥さん、里山くんを振ったって本当ですか？」
（あ、たしかそんな名前だ）
友達の口から出てきた名前に、喉にひっかかっていた小骨がとれたような気分になる。
でも、ここでありがとうと言うのもおかしい。
「そうよ」
無難に返事する。
「きゃ―！」
「やっぱり！」
「白鳥様カッコイい！」
何人かが騒ぎ出す。
教室の視線が集まって恥ずかしい。
（あ、クロまで見ている…）
睨みつけたらすぐに目を逸らした。
（まったく…）
クロはヘタレで、いつまで経っても手のかかる弟みたいな幼なじみだ。
※
『私』は、白鳥優里。中学二年生。
『好き』って言葉だけで理解したつもりになっていた、何も知らなかった子供。

ユリ：初めての気持ち（2）

「…はい」

「「「「…え？」」」」

それは、ＨＲの時間だった。議題は、生徒会選挙。
立候補者はいないかと聞かれたが、もちろん、皆こんなものやりたくない。
お互いに牽制しあいつつ、そのまま解散しかけた。
そんな中、一人の少年が手を上げた。

「副会長に、立候補します」

クロだった。

「…まあ、黒井くんならいいかな…」
「なんとかなんじゃん？　多分」
「やりたいみたいだし…」
「…では、副会長候補、黒井夢君、と…」

係りの生徒が所定の用紙にクロの名前を書く。
クラスの仲間が、パチパチとまばらに拍手を送り、クロは副会長候補になった。

「…え？」

私は、何かの冗談を見ているような気分だった。

（クロが…、生徒会副会長…？）

無理に決まっているのに…。

※

選挙では、クロの他に副会長候補はいなかった。生徒会長候補もいなくて、後で改めて候補者を探すらしい。

信任投票という形で、クロは全校生徒の三分の二以上の票を集めて、副会長になった。

「…クロちゃんの演説、かっこよかったね」

「…うん」

冬歌とおしゃべりしながら、家へと帰る。

普段は隣にクロがいるはずなのに、生徒会に選ばれたから残っているらしい。

ぽっかりと空いた場所が妙に居心地が悪くて、多分、冬歌も同じようなことを感じていてと思う。

※

次の日、私は生徒会長に立候補した。

（…どうせ、クロか何か失敗をするに決まっているし、そのフォローをできるのは私くらいだもの…）

それが理由だった。

冬歌は「ずっるーい！　私も入りたい！」とだだをこねたが、もう役職も埋まっていたし、アイドルの仕事が入ったりで忙しいので生徒会には入れなかった。

※

生徒会の活動にも何とか慣れてきた頃、他の役員は皆帰り、私とクロだけが残って仕事をしていた。
クロはなんとか仕事をこなしていたが、やっぱりミスをして私が手伝っていたのだ。

お手洗いから戻ってクロの様子を確かめると、なんと居眠りをしていた。

「…ク…！」

ロ、と怒鳴りかけて、彼の机の上に置かれた書類の束に気がついた。
どうやら、ようやく仕事が終わって、疲れて眠ってしまったらしい。
簡単にチェックしたが、今度はミスもない。

先生に提出しに行こうとして、ふと、いたずら心が起こった。
クロの寝顔を観察してみることにした。

（…だらしない顔…）

何かいい夢でも見ているのか、口元がほころんでいる。本当に同じ年かと思うほど子供っぽい。冬歌の方がまだしっかりしている。

「…はぁ…」

私が面倒みないと、仕事一つこなせない幼なじみに、急にイライラしてきた。

（私が働いているのに、幸せそうな顔で寝ているなんて…）

馬鹿馬鹿しくなって、観察するのをやめた。

（…こんな関係、終わらせないといけないな…）

いつまで経ってもクロは成長しないし、私が苦労ばかりする。
来年は受験もあるし、いい加減、幼なじみだからって面倒をみるのはやめにしよう。
鞄を手に取り、重い足取りで生徒会室を出る。

机で寝ている幸せな幼なじみに、小さく、一言だけ告げた。

「ばいばい」

ユリ：初めての気持ち（3）

土下座するクロを見ながら、私はドキドキしていた。

（さっきは一瞬だったから大丈夫だと思うけど…）

今、私の顔は赤くなっていないだろうか？

クロに気づかれていないだろうか？

※

『私』は必要な書類を提出する為に職員室のドアをくぐった。

生徒会の顧問は、私のクラスの担任でもある。

これまでも様々な用事で呼び出されていたので、迷うことなく先生のもとへ向かう。

「あら、白鳥さん。…あ、生徒会の仕事ね。ごくろうさま」

一瞬不思議そうな顔をされたが、クロと一緒に残って仕事をすると言っておいたのを思い出してもらえたみたいだ。

「どう？　黒井君の仕事の方は？」

書類のチェックをしてもらっていると、クロの話を振られた。

「全然使えません」

私は正直に答えた。

「仕事は遅いし、今日みたいにミスはするし、物覚えも悪いです」

「あらあら」

困ったような顔をする先生。でも、全部事実だ。

「今日なんて居眠りまでしています」

（…まったく、なんで生徒会に入ったのかしら…）

呆れてしまう。

「そう…、でも、彼も頑張っているみたいだし…」

「努力しても結果が伴わないとダメなんです」

「あらあら」

先生は何故かクロの肩を持つけれど、出来るなら辞めさせたほうがいい。

そう言おうとした。

「せん…」

「でも、もっと頑張ってもらわないと西城≪さいじょう≫はねぇ…」

「え？」

先生の口から出た高校名に、言葉が止まる。

（西城って、もしかして西城高校…？）

「あ、ごめんなさい。何かしら？」

「…いえ、別に、あの…、西城って都立の西城高校のことですよね？」

「あら、口に出ちゃってた？　…う～ん、まあ、貴方なら大丈夫かしら…」

ちょっと迷ったような素振りを見せたが、結局すぐに教えてくれた。

「西城が、黒井君の希望校なのよ」

※

私は呆然としたまま、生徒会室に戻った。

自分の席から椅子を持ってきて、クロの寝顔をじっと見つめる…。

（西城高校がクロの志望校……）

クロだって知っているはずだ。
西城はかなり偏差値が高い。
クロの成績では、正直、かなり厳しい。

『黒井君に相談されてね、生徒会活動とかすれば、評価されるかもしれないって言ってみたのよ』
『家でも遅くまで勉強しているみたいでね、実際、少しずつ成績は伸びているんだけど、ちょっと具合悪そうで心配なのよね』

先生の言葉の通り。
それだけ努力しないと、入れるかどうか分からない高校。
それでも、行きたいって思ったのは、多分。

「私と、一緒の高校に通いたいの…？」

口からこぼれた言葉に、ドキリとしてしまった。

（クロと、一緒の高校に通う…）

今とは違った制服に身を包んだ、少しだけ大人っぽくなった、私とクロが…。
机の上、クロの寝顔をもう一度よく見てみる。

（…ちょっとは、大人っぽくなってるかな…）

不思議なことに、さっきとは逆の感想が出てきた。

トクンッ

「…！？」

心臓の音が聞こえた。

トクン、トクン、トクン、トクン…

（あ、あれ…？）

急に心臓の音が大きくなったみたいだ。そのまま、鼓動が、速く大きくなっていく。

同時に、頬に熱が集まってきて、多分、顔が真っ赤になっているんじゃないかと思う。

（な、なに、これ…）

自分の体に何が起こったのかわからない。

周囲を見渡しても、職員室に行く前と変わったものなんて何もない。

閉められたままのカーテン、古ぼけたコピー機、役員の机、…そして、眠ったままのクロ。

トクン！

クロの寝顔を見て、心臓が一際大きく跳ねた。

「……！」

横に置いておいた鞄を手に、部屋から飛び出す。

そのまま、家まで走って帰った。

闇の何かから、私の知らない何かが飛び出してきそうで、怖くて、止まれなかった。

急いで部屋に戻って、ベッドに倒れこむ。

まだ心臓が痛い。息が苦しい。

（全力疾走したせいよ、だから、苦しいのよ）

そう思いたいのに、頭の中にクロの寝顔が勝手に浮かんできて、ますます胸が苦しくなる。

その夜は、ご飯も食べれなくて、眠ることもできなかった。

※

翌朝、ようやく落ち着いた私は、トウカと一緒にクロが出てくるのを待っていた。

ちょっと眠たいけど、いつもどおり。

昨夜の出来事は夢だったんじゃないかと思ってしまう。

「クロちゃ〜〜ん！」

我慢しきれなくなったトウカが、大声でクロを呼んだ。

これも何回も見てきた光景だ。

ここで『ごめんごめん！』ってクロが謝りながら出て、私が『遅いっ！』って怒るのだ。

そんな、いつもどおりの、平和な朝になるはずだったのに。

「ごめんごめん！」

トクッ

「…え？」

私の戸惑いなんて知らずに、クロが飛び出してくる。
いつもの顔。でも、すぐに私に視線を向けてきた。

「あ、ユリ！」

トットットットッ…

（いや、何、こ、怖い…）
昨日と同じように心臓が暴れ出した。

「どうして昨日起こしてくれ…」

「ごめん！　私、先に行くから！」

私はそう言ってクロの前から逃げ出した。
何故か、まともにクロの顔が見れなかった。

※

そして、現在、目の前で土下座をするクロ。

（…ようやく慣れたと思ったのに…）

こんなに情けない姿を見ているのに。

『好きだよ』

不意打ちされたみたいにさっきの言葉を思い出して、頬が熱くなる。

「弁当箱、後で家まで持ってきなさい」

私は何とかそれだけ言って屋上から逃げ出した。

「あ、ユリ…！？」

クロが呼び止めた気がするが、構っていられない。
階段を駆け下りながら、私は泣きそうな気分だった。

（多分、今日の夜もあんまり寝れないんだろうな…）

肌は荒れるし、目の下にクマはできるし、眠たくてイライラして授業に集中できない。
全部、クロのせいなのに、真正面から顔を見ることもできない。
それに、私の気持ちなんか、全く理解できてないんだろうと思うと、腹だしい。

（クロの、ばか）

第１４話：今日の用事

午後の授業が始まる直前に、俺は教室に戻った。
「おお、黒井。飯買いに行ったまま戻ってこなかったから、どうしたかと思ったぜ」
大介が早速声をかけてきた。
「ごめん、途中で用事ができちゃって。もしかして、戻ってくるの待っていた？」
「ああ、もちろん…」
俺の言葉に大介が頷く。大変申し訳ない。
（ユリと一緒だったなんて言えないけど、連絡くらいすれば良かったかな）
そう思ったのだが。
「…一秒も待たずに食べたぜ！」
「少しは待てよ！」
「わはははは」
何故か誇らしげに笑われた。
（…文句を言える立場じゃないんだけど…）
「…はあ…」
ため息が出るのはしょうがないだろう。

…キーンコーンカーンコーン…

「あ、もう授業か。じゃあ、後でな」
「…おー」
自分の席に戻る大介に向かって、適当に手を振った。

（大介の扱いなどこの程度で十分だな）

改めて認識し直した。

※

…コーン…

「で、ちょっと聞きたいんだが」

本日最後の授業が終り、大介がやってきた。

「黒井は放課後、暇か？」

「え、えっと…」

突然の質問に、困惑してしまう。

「ほら、前に言ったろ。この辺地元だから案内してやるって」

「あ…」

思い出した。入学式の日にそんな話をしたが、何だかんだでまだ行ってなかったのだ。

（…あれ？　昼飯に美味い店を紹介してくれるって話だったっけ？）

まあ、細かいことはどうでもいいか。

「で、暇なら案内してやるよ。今まで学校の外でつるんだことなかったしなー」

「まあ、確かにそうなんだけど…」

もちろん、理由はある。

入学してから一週間は、部活見学とかで色々と忙しかったし、その後は精神的に死んでいたからだ。

（…つまり、半分以上は、お前のメールアドレスのせいだな）

さすがにその言葉は飲み込んだ。

あまりに情けない理由だし、純粋に誘ってもらえて嬉しかったから。

でも。

「…ごめん、ちょっと用事が…」
俺は大介の誘いを断った。
「また？　昼と同じやつ？」
「いや、別件」
「そうか。…じゃあ、明日なら大丈夫か？」
「そ、それも明日じゃないと分からないんだ」
「…分かった。じゃあな…」
寂しさを隠そうとせず、悄然と肩を落として大介は帰っていった。
「ごめんな、また明日ー」
手を振って見送ったあと、俺も思い出したように帰り支度をした。

※

急いで家に帰った。
玄関の鍵を開けると、見覚えのある小さな靴が一足。
（先に来てたのか…）
「ただいまー」
一人暮らしになってからは言わなくなった言葉を、久しぶりに言った。
そのまま二階の自分の部屋へ向かう。
ガチャ
いつも通りの見慣れた部屋。机とかクローゼットとか漫画がつまった本棚とか。
そんなものはどうでもよくて、ベッドの上に視線がいった。
「…ムニャムニャ…クロちゃん…すぅすぅ…」

今日の用事が、眠っていた。

第１５話：男はみんな冒険者！

「待っている間に寝ちゃったのか…」
布団に包まっているトウカを起こさないよう、静かに制服を着替える。
で、いつも通りの楽な格好になったのはいいが。

（さて、どうしよう）

もちろん、寝ているトウカを起こすという選択肢はある。
それは普通だろう。しごく一般的、常識的な判断だ。
一人の人間として鑑みて、何も批判するべきところはない。

だが、男としてそれでいいのか？

「いいわけがない！」
「ふあ！？」

（！　しまった！）

ついエキサイトして大声を出してしまった。
トウカが、わずかに目を開いて、俺を見つめる。

「…んにゅぅ…あ…クロちゃんだ…えへへ～♪」

ほにゃあ、という効果音がつきそうな笑みをみせるトウカ。
やましいところがある俺は何も反応できなかった。

「…えへへへ……すぅ…」

しばらく見つめあったのだが、すぐにまぶたの重さに耐えられないという感じで瞳が閉じられた。可愛い寝息を立て始める。

ドクドクドクドク…

早鐘のようになった心臓を押さえながら、改めてトウカの様子を伺う。

…ちょいちょい

「…ん…にゅう…」

ほっぺをつついても反応なし。

…プニプニ

「…にゃぁ…ふにゃあ…」

子猫のような鳴き声をあげるが、起きる様子はない。
トウカのぽっぺは大変柔らかくてスベスベで触り心地が良かった。

ごくり

もはや、これは神が与えた好機、いや試練に違いない！

（昨日トウカにされた“いたずら”の仕返し？をせよという試練に、みごと打ち勝ってみせる！）

今まで祈ったこともないどこかの神様の試練に、俺は勇ましく立ち

向かうことにした！

…なんかもう、人間としてダメですよね…。

※

ベッドの横に座り、俺はなるべく丁寧に掛け布団をめくった。
そろそろと腰の辺りまで下ろしていくと、当然、中からトウカの体が現れる。

裸で寝ていた。

なんてオチはない。
トウカのお気に入りらしい、よく着ているのを見かけるウサギのプリントがされたTシャツが出てきた。
だが、常々思っていたのだが、これは。

（…なんと凶悪な服装なのか…）

もちろん、女の子が普通に着ていて不思議じゃない格好なのだが、
トウカが着ると戦闘力が二桁は違う。
可愛らしいウサギのプリントが、内側から押し上げられて、伸ばされてしまっているのだ。

「こんなに引き伸ばされて…可哀想に」

博愛の精神を発揮し、ウサギさんを助けてあげるべきだと思った。

（動物虐待反対！　可愛らしいウサギさんに愛の手を！）

良心の声に従い、Tシャツの裾に手をかけたが、ふと何かが気になった。

「あれ、何かいつもと違うような…？」

顔を近づけて、もっとよく見る。

なんということだ！

トウカはブラをつけていなかった！！！

「ん…」

「……！！」

感動に打ち震えた瞬間、トウカが軽く身震いした。掛け布団を探すように手を動かす。

上に掛けるものがなくて寒くなったのかもしれない。

（い、今目を開けられたら…）

トウカの胸を間近で覗き込む俺の姿が、ばっちり目に飛び込んでくるだろう。

もしそうなったら。

（そうなったら、トウカはどんな反応をするだろう？）

予想できない。

見てみたい、と思った。

でも。

「んにゃ…？　…にゃあお……にゃ…？」

思いついたことをなんとか飲み込み、手の届かない場所まで逃げた。
そのままトウカの様子をさぐる。
寝ぼけているようで布団がどこか全く分かっていない。
変な鳴き声を上げているが、起きる様子はなかった。

「…んふぅ…」
ころん

結局、布団を諦め、寝返りを打って背中を向けられてしまった。
まだ、しっかりと寝ているようだ。

※

無事心臓に悪い時間が終わり、トウカの側に近寄った。
正面に回りこんでウサギさんをもっとよく見たかったが、さすがに壁抜けは出来ないので断念した。
その代わりと言っては何だが、俺もベッドに横になる。
ついでに寒さで目が覚めないように掛け布団を引き上げて、二人で一緒の布団に包まる。
布団からトウカの甘い香りがして、かなり幸せな気持ちになった。
だが、今以上に幸せになれそうな予感が俺を呼んでいる。

結局、男とはみな冒険者なのだ！

昨日の朝、電車の中でユリにやったように、後ろから抱きしめた。
左手はベッドに挟まれているので、右手だけを使う。
ユリと比べてもトウカはかなり小柄なのだが、なんというか、プニプニした感じの抱き心地だった。ほっそりとしたユリの体とは全然違う。

でも、ずっと抱いていたくなるという点では同じ。
トウカがもっとずっと小さい頃から知っていた。何度も触れて、何度も抱きつかれた。
その度に気づかない振りをして、幼なじみだからと目を逸らしてきた、とっても魅力に溢れた女の子の体。

（あー、ヤバイなー）

ギュッと抱き締まる。
こうして抱いているのだけで十分気持ちいい。
心が満たされていく。
今までずっと我慢していただけで、本当はずっとこうしたかったんだと悟る。

（…なんか、どんどん泥沼に足を踏み込んでいるような気もするのだが）

でも、抜け出せない。
抜け出すつもりも、今のところない。

トウカとユリが許してくれるなら、まだしばらくはこのままでいたい…。

※

で、改めてまた大いなる二つの頂に進軍しようとしたら。

「…う、ううん。あ、あれ？　クロちゃん？」

トウカが目を覚ました。

第１６話：いただきます（前書き）

総アクセス数が１万人突破しました。
ありがとうございます！

第１６話：いただきます

「え？　え？　クロちゃんだよね？」

背後から抱きしめられているので、誰なのか確信が持てていないらしい。

懸命に手足を動かし体の向きを変えようとするのだが、しっかりと抱きしめられているので難しいようだ。

寝起きだから力が入らないとか、まだ若干寝ぼけているとかもあるんだろう。

「苦しいよ～、腕重い～、クロちゃんだよね？　寝てるの？　起きてよ～」

可愛らしく抗議の声をあげるトウカ。

（…よし、このまま寝ているフリをしよう）

俺はこのまま押し切ることにした。

もちろん、最初から起きていたと教えてもいいんだが、万一寝ているトウカにいたずらをしようとしていたことがバレたら…。

（…あんまり怒らない気もするけど、すごく恥ずかしい）

というわけで、寝ているフリをしてトウカを弄ることにした。

「…ムニャムニャ…柔らかい枕だなぁ…」

ギュウウ…

「ふにゃあああ！？　ク、クロちゃん！　トウカは枕じゃないよ！」

実際にムニャムニャと寝言を言う奴なんていないのに、そこにツッコまないトウカ。

（…あれ？　トウカがさっき言っていたような？）

……。

まぁ、いいや（思考放棄）。

で、やっぱり起きているトウカの反応は可愛いなあ。

折角だし、少し戦法を変えよう。

「…トウカ…」

「あ、クロちゃん、やっと起き…」

もう一度、トウカの体を強く抱きしめる。

「…もう、我慢できないんだ…」

「た、…にゃあああああああああ！？」

トウカの体が一瞬で強張った。

「あああの、クロちゃん？　その、え、えっとね、んっと…」

トウカがしどろもどろに何かを言おうとするが、あまりのことに言葉が出てこないようだ。

だから、トウカの耳元に口を寄せて、囁く。

「いいだろ、トウカ」

「……。……ひゃ、ひゃい……」

少しの沈黙の後。
何とか声を搾りだして、答えを口にする。トウカの首がコクコクと上下に動いていた。

「ありがとう」

背後からだが、トウカは見ていて可哀想なほど緊張しているのが分かった。
だから、言ってあげた。

「…こんなに美味しそうな肉まん、トウカにだってあげられないよ…」
「えええええええ！？　待って、肉まんって何！？　クロちゃん寝てるの？　さっきの全部寝言…」

（あぁ、可愛いなぁ…）
冗談で言ったのだが、本当に我慢の限界がきてしまった。
トウカの白いうなじに、こう、ムラムラとね…。
なので。

「いただきます」
ぱくり

「ひゃあああぁぁ！？」

俺のボケに緊張が途切れた一瞬を狙い、いただいてしまいました。
もちろん寝ぼけてなんかいないので、しっかりと堪能させてもらいます。
（いやー、美味しい肉まんですなー）

はむはむ

「やっ、ひゃうっ、まっ、ちが、それっ、ト、トウカ…」

何とか間違っていると言おうとするのだが、予想もしていなかった状況に混乱し、突然の刺激に翻弄されて何も言えないようだった。

「…おかわり…がじがじ…」

「やああ！　噛んじゃ…だめぇえ！　歯があたって……だめ、トウカなの！　食べないで…」

噛んじゃダメらしいが、噛まずにはいられない。

そのまま続けようとして。

「……やだあああああっ！　だめ！　こわい！　やめてぇ！！」

トウカの怯える声が響いた。

※

「はあ、はあ…。あ…、クロ…ちゃん、…起きたの…？」

もぞもぞと動いて、今度こそ俺と向き直るトウカ。

俺は、正面からきちんとトウカを見た。キスできそうなほど近い。

トウカのキラキラとした瞳に、うっすらと涙が浮いていた。

「…ごめん、トウカ」

「？　何で謝るの？」

首を傾げてトウカが聞いてくる。

俺は正直に答えた。

「実は、ずっと起きてたんだ。今日も、昨日も」

「ふえええ！？　ほ、ほんと？」

驚きにトウカが目を丸くする。

（…本当に気がついてなかったのか…）

もしかしたら、トウカも気がついた上で黙っているのかと考えていたが、どうやら違ったらしい。

「…うん。だから、ごめん。…それに、今も調子にのって…」

俺が謝罪の言葉を最後まで口にする前に。

サッと、目を逸らされた。

※

（嫌われちゃったか…）

色々とあって、俺は浮かれすぎていたのかもしれない。

それで昨日も今日もトウカを泣かせたんだから、当然の結果だ。

…元々俺とトウカがつりあっているわけでもないし、もっと深い関係になる前に、ここで嫌われて良かったのかもしれない…。

そう考えてみても、当然、悲しい。

第17話：問題

…ズルズル…

「…ん？」

何故か、トウカの頭が布団の中に引っ込んでいく。

「…んみゅぅ…」

こつん

布団の中で、トウカの額が俺の胸に当たった。

「…うううぅぅ…」

唸っていた。ぐりぐりと額を押し付けながらトウカは唸り声をあげていた。

これは、怒っているというより…。

「…恥ずかしがってる？」

「うにゅう！！　……うううー！」

だだっこパンチというやつか。

幼児退行を起こし、日本語を話せなくなってしまったトウカにポカポカと叩かれた。もちろん全然痛くない。

一分足らずか、それとも三分くらいか。しばらくされるがままに受け入れる。

叩きつかれ息が乱れて、それを必死に整えたトウカが、ようやく口を開いた。

「…クロちゃん、昨日いつから起きてたの？」
「最初から」
隠し事はやめようと思ったので素直に答える俺。
「……じゃ、じゃあ、トウカが何言ってたのかとか、全部？」
「えーっと…、…泣きながら…」
「ふにゃあああああー！！　言わないでーー！！」
正直に答えたのに、また叩かれた。
※
ぐったりとしているトウカに聞いてみた。
「…怒らないのか？」
「え？　なにを？」
不思議そうに聞かれると俺の方が困るんだが…。
「その、さ。今とか泣きそうだったじゃないか。ふざけ過ぎたかと思ったんだけど」
俺の言葉を聞いて、トウカが恥ずかしそうに答える。
「…あれは、寝ぼけたクロちゃんに、…あのままバリボリ食べられちゃうんじゃないかと思って…」
さすがにそれは無い。

「…えっと、じゃあ、俺がずっと寝たフリしていたこと」
「それは…うーんと…。…えい！」
「うわっ！？」

ちょっとの間考えていたかと思うと、仰向けに押し倒された。
そのままトウカは俺の上にまたがり、体を少し上にずらして、ベターっと抱きついてきた。
顔の位置を調節して、顎を肩の上に置く。
なぜかものすごく脱力している。一昔前に流行ったタレたパンダみたいな感じで可愛い。
胸が当たって気持ちいいと考えてしまったのは秘密だ。

「…ど、どうした、急に？」
「あのね、トウカね、今怒ってるの。だから…」
「…だから？」

トウカの息が耳朶をくすぐるが、そんなことを言う場合ではなさそうだ。
怒っていると言う割に楽しそうな響きがあって、いったい何を言われるのやら。

「クロちゃんには、罰を与えまーす」
「…せめて、優しいのにしてください」

トウカのことだから何を言われるのか、全く予想できない。
俺の哀願に、トウカが顔を上げた。
見詰め合う二人。

「もちろん、ダメ♪」

例の、小悪魔の笑顔で却下をされた。
※
「というわけで、問題です」
「…ああ、クイズ形式なんだ」
（難しい問題出して困らせようってことなのかな、まあ精一杯頑張ればトウカも許してくれるだろう…）
「正解できないと、罰としてクロちゃんを嫌いになります」
「マジで！？」
罰が厳しすぎる。
狼狽しまくる俺。
（…いや、ここはまだ嫌われていないとポジティブに考えるべき場面なのか？）
結局、『まだ』なんだけどね。
そんな俺の内心に構わず、トウカの問題は進んでいく。
「解答のチャンスは…五回くらい？」
「けっこうアバウトなんだ！」
「じゃ、きっちり五回で♪」
「しまった、俺のバカーーー！！」
頭を抱えて壁にぶつけたいところだが、上に乗っかっているトウカが二重の意味で許してくれないだろう。
そして、問題は出された。

「では、問題です！　『今、トウカがクロちゃんに一番してほしいこと』はなんでしょう？」

※

「今、一番してほしいこと？」
「そうだよー。それをトウカにしてくれたら許してあげるー♪」

すごくご機嫌な顔で言ってくるトウカ。
全然、怒っているようには見えないんだけど。
（でも、トウカがしてほしいことか…、何かいっぱいありそうで逆に思いつかないというか）
一応、怒ってるって言ってたし、それは関係するのだろうか。

「えー……寝たフリしてごめんなさい、とか？」
「あと四回です」
「ちょ、待って、今のなし、ジュークです、ジョーク！」
「ダ・メ♪」

当然だが、容赦なく減らされた。

「うぅ…うむむ…」
「にゅふふふふー」

ニコニコと見つめられる。
そんなに俺が悩む姿が面白いのか！　俺は見世物じゃないぞ！
なんて、言う権利も無いので視姦されるがまま。甘んじて受けようではないか。

（でも、他の、ねえ…）

「早く答えないと解答回数減らしちゃうよー」

焦れてきたのか、ついにはそんなことを言い出す始末。

（あ、もしかして、出題する前にわざわざ位置を変えたのって…）

思いついたことを行動に移してみた。
横で遊ばせていた手を、トウカの背中に回す。
力を込めすぎないように。痛くないように。
でも、心を込めてトウカを抱きしめた。
トウカが驚いたような顔で見つめてきた。トウカも抱きしめ返してくる。

（これで、正解なのかな…）

そう思いながら、俺はその言葉を囁いた。

「…好きだよ、トウカ」

※

「ふにゃあああああん♪」
ごろごろ、バタバタ…

体中を使って喜びを表現しようと、俺に体をこすりつけ、尻尾の変わりに足をバタバタとさせている。

「クロちゃん、クロちゃん！　もう一回言って！」

目を輝かせてお願いしてくるトウカ。
…こういうところは、ユリと姉妹だと感じるなあ…。
その後１０回くらい言わされた。
※
「…満足した？」
「うん！」
元気よく答えるトウカ。こっちはごっそり気力を奪われました。
（まあ、正解したならいいか…）
「でも間違いだから、あと三回ね♪」
「なんだって！？」
驚愕の新事実発覚！
…追い詰められてきました。
※
「ヒントを教えてあげると、さっきのは二番目なの。残念でしたー」
「むむぅ…」
となると一番は今の以上の何かか…。
（ま、まさか初体け…）

つい妄想がピンク色になってしまった。
チャンスはあと三回あるし、とか悪魔が囁いてきて、つい耳を傾けそうになる。

（いや、こんなゲームみたいな風に、というのは…）

欲望に溺れそうになるところを、何とか良心（天使？）が反論しようとして、全く考えがまとまらない。

（ああ、グルグルしてきた…）

「お悩み中？　解答権一回で、すっごいヒントあげようか？」
「お願いします！」

一も二もなく飛びついた。
もともと俺は考え事が苦手なのだ。

「じゃあ、ヒントね。…実は、昨日トウカが言ったことに関係してます！」
「昨日、言ったこと…？」

よく思い出してみる。トウカが言っていたこと。
確か…。

「『クロちゃんが元気になるならトウカが何でも……』」
「きゃあああ！　げ、減点一！」

いきなり減点された。

「そんな、なんで急に！」

「トウカ、デリカシーのない人嫌い！」

ぷいっと横を向いてしまった。どうやら機嫌を損ねてしまったらしい。

確かにデリカシーがないと言われたとおりの行動だったが、解答回数＝好感度というシステムがあったと初耳だ。

（そうすると、三回あったうちの、一回がヒントで、もう一回が今減点されて…）

単純な引き算。

「…あと一回だからね…」

第１８話：正解は？

「うーん…」

最後のチャンスをものすべく、精一杯頭を使って考える俺。
昨日トウカが言ってたことも考えた上で、『俺に』やってほしいことっては…。

（…つまり、俺ができること、あるいは俺にしかできないこと、ってことだよな）

他の誰でもなく、『俺に』頼んできたことがなかっただろうか？
そう思ったとき、頭の中でトウカの言葉が蘇った。

『やっぱり、初めては好きな人から……今度してね♪』
『じゃあクロちゃん、彼氏つくらないから……してくれる？』

（…ああ、そうか）

トウカが俺にしてほしいこと。
ようやく正解を見つけた。

※

「…トウカ…」

横を向いたままの、トウカの頬に手を添えた。
ぴくっ、と震えたけれど何も言わない。

「こっち向いて」

頬を優しく撫でながらお願いすると、おずおずと顔を向けてくれた。
期待と不安に揺れる、濡れたような瞳が閉じられる。
口紅を引いているのだろうか、瑞々しく鮮やかなピンク色をした小さな唇を、少しだけ前へと突き出す。
恥ずかしさに頬を染めて俺を待っている。
トウカは今までもずっと俺だけを待っていたのだ。

頬に触れた手がトウカの熱を伝えて、胸中に愛おしさがあふれる。

俺はトウカにキスをした。

※

一瞬だけれど、しっかりと俺たちの唇は合わさった。
温かく、少し湿っていて、俺の唇を優しく受け止める感触。
その柔らかさに溺れてしまいそうになった。
それ以上すると止められなくなりそうで、なんとか唇を離した。

「…はうぅぅー…」

俺の上で目を瞑ったまま、トウカはのぼせたように真っ赤になっていた。
頬に触れていた手を背中に回し、落ち着かせるようにゆっくり撫で擦る。
すると、トウカは俺の首に両手を回し、すがりつくように抱きついてきた。

「…クロちゃん…なんかふわふわするよぅ……」

とろん、とした目で見つめてくる。

「抱きしめてぇ…トウカがどっかに行っちゃわないように、しっかりと…」

第１９話：お昼寝

「…ふにゃらわあぁ…」

ふいに腕の中で、なにやら奇怪な生物の鳴き声が聞こえた。

「…クロちゃんの腕の中って暖かくて……なんか眠くなってきちゃったぁ…」

トウカの欠伸だった。

「昨日ね、クロちゃんのせいで寝不足なの…。…にゃふうぅ……このまま眠っていい？」

トウカが聞いてくる。

一応質問という形だが、断られるなんて夢にも思っていない顔。

ついでにかなり眠そう。

「う～ん、いいよ」

（まあ、少し昼寝するくらいなら問題ない。隣の夕食の時間までに帰せばいいだろう）

ちなみに、今は夕方になろうかという時間だった。窓の外が青と紫とオレンジに染まっている。

「やったあ！　ありがとう！」

許可したら、トウカが一瞬だけ身を乗り出し軽くキスしてきた。

その後すぐに元の位置に戻り、俺に抱きついて目を瞑る。

「……んにゅ…くろちゃん……すぅ…」
すぐに寝息をたてるトウカ。
抱きつかれたままなので、なかなか刺激的。
でも、さすがにもういたずらをしようという気にはならない。
そして、俺もトウカの体温を感じているうちに眠くなってきた。

※

「……」

……んあ？
今何か聞こえたような？
いつのまにやら真っ暗になっていた。
…何時だ？

「……ー」

時計を確認しようとするのだが、何故か左腕の感覚が無い。
というか、左半身全身に圧迫感があり動かない。
（え、何かの病気か？　…あれ、柔らかいな？）
右手で違和感のある部分を触ろうとするのだが、妙な感触がする。
「……ぉー」
（腫れてんのか？　右手の感触はあるけど、左半身に触られている

感触がないってことは、もしかして神経の病気！？）

慌てて謎の腫れをさするが、どうやらかなり大きいようだ。

左肩の辺りから、手が届かないくらい下の方まで続いている。足にも何かが乗っているような違和感。

「……ろぉー？」

（まさか、半身不随…）

サーッと顔から血の気が引ける。

（…いや、実は変な体勢で寝ていて血が回っていなかっただけとかな。正座した後、痺れて感覚がないとかあるし）

とりあえず、自分をごまかしてマッサージをしてみることにした。

上から下へと撫で回し、血行促進を促してみる。だが、効果はあまり感じられない。

妙に触り心地が良い。手を滑らすと、腰の横に丸々とした柔らかい腫瘍があった。

（な、こ、こんなに大きな…？　しかも、二つ！？）

驚きで鷲掴みしてしまった。

「…ぃの？「ふにゅっ！」うかぁ……ク「…うにゃ～ん」……」

…なんか、胸元の辺りから聞きなれた声がしたような…。

視線を向けると、こんもりとした影。

「うにゃぁん……くろひゃ～ん…」
トウカの寝ぼけた声がはっきりと聞こえた。
「…ああ」
ようやく記憶が繋がった。
トウカと一緒に昼寝をしていたのだ。
枕となっていた左腕が、そのせいで痺れているようだ。だんだん感覚が戻ってきて痛痒い。
左半身の圧迫感は、うつ伏せに近い形で抱きついているトウカの体。
先ほどから鷲掴みして揉んでいるのはトウカのお尻だった。
「…って、うおおおっ！？　ごめん！」
慌てて手を離したのだが、「うにゅうぅ…」と悲しそうな声を出された。…揉んでいて欲しかったのか？
「と。そうだ、起きろトウカ」
外が真っ暗なのでけっこう寝ていたようだ。
まだ寝ぼけているトウカの頬をペチペチと叩くと、「あとごふんー、ごふんでおきるからー…くうぅ…」という返事。
ぐずるトウカに、早くしないと遅刻するわよ！とか言いたくなったが、キャラが違うので堪える。
「起・き・ろ！」
ペシンッ

「んにゃあ！？」

お尻をはたいてみたら、一発で起きた。

※

「うううぅ…、まだ夜だよ、寝ようよ～」

「いやいや、もう夜なの。ちゃんと夕飯食べなさい」

「…ダイエット中ってことで～」

トウカはなかなか帰りたがらない。

まあ、俺も名残惜しんだけどソコはソレで。

「ダメ」

「うにゅぅぅ…、クロちゃんはトウカのこと嫌いだから追い出そうとしてるんだー」

「いや、そんなわけないだろ？」

「そうだもん！　トウカの体に飽きたんだもん！　一度やったらポイ捨てにするんだもん！」

「どこでそんなセリフ覚えたんだか…」

しかもやったってキスのことか。

呆れてものも言えない。だが、拗ねるかと思ったトウカが、一転、甘えてきた。

「違うっていうなら～…」

「うん？」

「キスして♪」

「……結局それか」

「えへへ～。恋人同士の別れのチュウだよ～♪」

「はいはい」

もちろん嫌じゃない、というか『恋人同士』というのが微妙にくすぐったくて嬉しい。
唇が触れるだけの軽いキス。
すぐに離した。

「にゃー、もっと長くー」

ご不満な様だが答えられない。

「だめです」
「なんでぇ？」
「…だって、トウカを離したくなくなっちゃうだろ？」
「……クロちゃ～～～～ん！！！」

我ながらキザなセリフだったが、どうやらトウカのツボにはまったらしい。
トウカが抱きついてきて自分からキスをしてくる。

「あ、やっぱり二人とも居るの？　返事がないから勝手に上がってるわよ」

ドアの向こうでユリの声が聞こえた。

第２０話：壁

ふにゃあああああ！？」
「ユ、ユリ！？」
突然の声に飛び上がらんばかりの俺たち。
「？　何よ、変な声出して？　入るわよ？」
「にゃ、にゃ……」
「ちょ、ちょっと待って……」
ガチャッ
「あれ？　電気つけてないの？　ご飯だから…」
ユリが手馴れた様子で照明のスイッチを入れた。
「いい加減帰って、きな……さ……」
そして、時が止まった。
※
いつも通りの部屋。机とかクローゼットとか漫画がつまった本棚とか。
そんなものはどうでもよくて。
ベッドの上、同じ布団の中で抱き合う俺とトウカ。

腕を回して今にもキスをしそうな体勢。というか、していた体勢。
「い……あ……え？」
衝撃の光景に、ユリも固まる。
沈黙を破ったのは、ユリとトウカだった。
「あんた達、何をして……！」
「ふにゃあああああ！！　見ないでええええ！！」
恥ずかしさに耐え切れないという態度で、トウカが布団を奪って虫のように丸まった。
一人だけ包まる。
「ちょっ、待って、俺放置！？」
「…クロ？　今日はきりきり吐いてもらうわよ？」
「…ハイ」
ユリに言われるまでもなく、俺は床に下りて正座した。
※
「……グスッ……」
「で？」
「…はい」
ベッドの上で正座をさせられ、べそをかくトウカ。
仁王立ちで怒りの気を発するユリ。
そして、土下座をする俺。

「はいじゃないでしょ。冬歌と何してたの？　……ああ、もう、怒らないから冬歌は先に泣き止みなさい」
「…お、おねえちゃ…」
「……えーと、そのー」
「クロはさっさと言え」
「キスをしました」
「……うわーんっ…」

トウカがまた泣き出した。
なんというか、すごく誤解されそうな状況ですよね。

「…そう…」

なのに怒るのではなく、ユリは悲しそうな顔で冬歌の頭を撫でた。

「ほら、いい加減そろそろ泣き止みなさい。…冬歌、邪魔しちゃってごめんね？」
「……へ？」

ユリの言葉に愕然とする俺。

「別に、クロが無理やりとか考えてないわよ。…この子があんたの事好きだって知っているし」
「え、うん…」
「だから、二人の邪魔しちゃったのかなって」
「…ユリ…」
「私、帰る。…冬歌は落ち着いたら帰ってきなさい」
「あ…」

寂しそうな顔でユリが立ち上がった。
本当に一人で戻るつもりなのだろう。

「…じゃあね」

拒絶？
それとも諦観だろうか？

離れていくユリの背中を見て、俺たちとの間に壁が出来たような気がした。

第２１話：姉妹

頭で考える前に手が動いていた。

グイッ

「あっ」

「……えっ、冬歌？」

伸びた手が、二つ。

俺とトウカの手が、ユリを引き止めていた。

「…おねちゃん…。…もうちょっと、いてぇ…」

涙でぐしゃぐしゃの顔で、トウカはユリに抱きついた。

「なんでもない、から…。…いかないでぇ…」

「冬歌…」

ユリが抱きしめ返す。

「…一緒に帰るなら早く泣き止みなさいよ、ばか」

途切れ途切れに「おねえちゃん…」とトウカが呟く。

ユリがトウカを優しく撫でる。

俺は二人一緒に抱きしめた。

※

あの後、泣き顔を見られたくないと言われて、部屋を追い出された俺。
姉妹がとても仲良しで悔しいので、階段にへたり込み悲しみをアピール。

「ほらユリ、トウカ。おばさん待たせているんだろ？　早く来いよ」
「…なんで、クロちゃんは階段の下でしゃがんでるのかな？」
「いやー、何でだろうね」
「この、ばか！」

どべしっ

滞空時間をたっぷり稼いだユリの膝が綺麗に決まり、潰れたカエルように床に倒れこむ。
…これは、死ねる。

「お～、クロちゃん生きてる？」

すぐそばにトウカがしゃがみ、俺をツンツンとつっついてくるのだが、なかなかの絶景だった。

「…残念ながら立ち上がれない体になっちまった」
「ええ！　大丈夫？　痛むの？」
「大丈夫…。だから、トウカはちょっと下がってくれ」
「？　うん」

素直に下がるトウカ。
無防備過ぎて不安だなぁ…。どうせ歩いて一分もかかんないけど。

「あ、そうだ。ユリ、ちょっと待ってて」

「…別にいいけど」
再び二階に上がり、鞄から取り出した小さな包みを手にして戻る。
「はい、ありがとう。美味かったよ」
「…当然でしょ」
弁当箱を返してそう言うと、ユリの口元が少しだけ綻んでいた。
「あ～！　お姉ちゃん、ズルい！　トウカも作る！」
その光景を見たトウカが騒いだ。

「冬歌は料理できないでしょ」
「…じゃあ、お姉ちゃんが作ってトウカが盛り付けする！」
「はいはい。まずは早起きの練習から始めましょうね」
「うぅ～…」
「…ははは」
「？　急にどうしたの？」
「なんで笑ってるのぉ？」
「いや、何か急に嬉しくなっちゃって。…くく…」
「「…変なクロ（ちゃん）」」

微妙に生暖かい目で見られたが、笑いが止まらなかった。
トウカとああいうことをして、ユリにその場面を見られたのに、いつもどおり過ぎる。
それが可笑しくて、嬉しくて、しばらく笑いが止まらなかった。
※

「…あとさ、お願いなんだけど、明日も弁当作ってくれない？」
「もちろんいいよぉ♪」
「嫌」
「…え」
まさか断られるとは思わなかった。
「な、なんで？」
「えぇ～！　一緒に作ろうよ～。トウカもお手伝いするよ？」
俺とトウカに詰め寄られ、ユリははっきりと言った。
「だって、明日土曜日じゃない。授業半日よ？」
「「…あ」」

第２２話：残り香

最終的に、なんとか口説き落としてお弁当を作ってもらうことになった。
しかも、ユリと一緒に屋上で食べるという約束付きで。

午前中で授業が終わるなら一緒にどこかで食べようといったのだが、最初は予定があると断られてしまった。
話を聞くと、明日の午後は美術部の面々と一緒に絵の具や画材を買いに行くらしい。費用が部費から出るので、部活動の一環として美術室に集合するそうだ。
お昼は集合時間までに各自で食べると聞いて我がままを言ってみたら、しぶしぶＯＫしてくれた。

もちろんその話を聞いていたトウカがむくれたが、午後はアイドルの方の仕事が入っているそうなので結局一緒に過ごせないと引き下がり、俺は元々予定などなくユリの手料理が食べれて万々歳。
こうして、八方丸く収まったというわけだ。
…まあ、正直言ってユリには迷惑ばかりかけてる気がしないでもないが、本当にダメならはっきりと断られるはずだし、「お弁当の中身、何がいい？」と聞いてこないだろうと納得する。

…あれ？
明日の放課後に関することで、誰かに予定を聞かれていたような…？
……。

（…まあ、思い出せないなら、どうでもいいことなんだろう）

※

「じゃあね」
「クロちゃんばいばーい！」

二人が家の中に消えていくのを見送って、俺は夕飯の買出しに出かけた。
夜の町がいつもと違って見える。

（…？　何も変わらないよな？）

不思議と月の光がいつもより綺麗な気がすること以外、特に変わったところは見当たらない。

※

買ってきた惣菜を食べながら明日のお弁当の中身を想像してはニヤニヤし、部屋に戻って布団を見てまたニヤけたくなるのを堪える。
自分は何という幸せものなのだろうか！

…でも、俺がこの幸せに相応しい人間かと考えれば、違う気がする。

トウカとユリ。

（一人だけでも釣り合いが取れていないのに、二人とも好きだなんて…）

いつか、二人とも失ってしまうんじゃないかと不安になる。
二人に俺が出来ることって、何かあるんだろうか？

※

その夜、トウカが残していった香りのする布団で俺は眠った。
何か夢を見た気がするが、朝になったら憶えていなかった。

第２３話：手

朝が来ると眠いのに気分が明るくなるのは何故だろう。
勉強は嫌いなのに学校は楽しい、みたいな心理が働くのだろうか。
まあ、どうでもいい話はほっといて登校の用意を済ませた。

「…いってきます」

玄関で靴を履いた後。
昨日ただいまと言ったので、何となく口にする。
当然、返事はない。
トウカが寝ていたので返事がないという点では昨日と同じ。
なのに、がらんとした家の中を想像すると、人恋しい気持ちになる。

（起こしに来てくれる幼なじみや、朝ご飯を作ってくれる幼なじみが欲しくなるよな、なんて…）

…今度頼んでみようかな。

※

「おはよう」
「クロちゃ～ん」

ドアを開くと、すでに二人が待っていた。

「おう、二人共おはよう」
「おはよ♪」

門を押し開いて二人に挨拶をすると、早速トウカが寄ってきて腕を絡めた。

「では、しゅっぱ〜つ！」

トウカの元気な声で俺たちは歩き出した。

（…やっぱり、二人がいてくれて良かった…）

※

道中の話題といえば、もちろんお弁当についてだった。

ユリは朝の六時頃から作り始めたらしく、量、味共に素晴らしい出来だとトウカが嬉しそうに話をする。

「…なんでトウカは味を知ってんの？」

「詰める時に味見だって言って摘んでたのよ。…朝ごはん食べれなくなるくらい」

「ああ…」

実にトウカらしい。

「んにゅ？　お姉ちゃん何か言った？」

「…別に」

「…ははは」

ユリが疲れた声を出して、俺は苦笑いを浮かべた。

「トウカに内緒で何のお話？　教えてよー」

「…冬歌がお弁当つくりで大活躍したって話よ」

「え～♪　そんな、照れるよお姉ちゃん～♪」

（…主に食べる方らしいけどね…）

その後もトウカは上機嫌で、珍しいことに素直に中学校へと向かって行った。

※

「……」

「……」

トウカがいなくなると急に会話がしぼんでしまった。

普段なら何かしらの話題が自然に出てきたり、あるいは会話が全くなくても気にならないのだが、昨日の空気がどこかに残っているような気まずさがあった。

※

無言のまま電車に乗った。

ただ、ホームから電車に移るときに、俺から手を握った。

隅に向かう。

ユリは、何も言わなかった。

第２４話：忘れ去られた男

車内の熱にやられたようで、のぼせ上がったユリの世話をしていたら遅れてしまった。
ギリギリだったが何とかＨＲ開始一分前に間に合い、俺たちはほとんど間をあけず、立て続けに教室に入った。
そして、奇異の目を向けられた。ユリだけが。

「よう黒井。見ろよ、白鳥さんがこんな時間に来るなんて珍しいこともあるもんだな」
「…俺もこんなギリギリに来るのは初めてなんだけど」

大介につい余計なことを言ってしまったが、なんか悔しかったのでしょうがない。

「あれ、そうだっけ？　授業中も居眠りとかしてるから、遅刻も普通にしていたような気がすんだけど」
「これでも無遅刻無欠席だ！」
「ごめんごめん」

大介が素直に謝る。悪意はなかったのだろうが、誠意も感じられない。
だが、まあいいか。今日も俺の機嫌はすこぶる良いからな。

「ったく。…あ、思い出した」
「何を？」
「何、って…」

もちろん、大介《お前》に今日の午後遊ばないかと誘われていたこ

とだ。

「…別に、何でもない」
「ふ～ん？　まあいいや。そういや、今日の午後ってあいてる？」
「あー、…一応…」
「何その返事」
「いや、そのな、昼過ぎ…、一時半くらいからならＯＫってことだ。別に他意はないぞ」
「おし、じゃあ飯はそれぞれで食べて、駅前に集合な」
「了解」

午後の予定が決まった所で担任が入ってきた。
いや～、大介の存在をすっかり忘れて、ユリかトウカと予定を入れてしまうところだった。

しかし、真面目に担任の話を聞く大介は、俺のこんな実状を知らないと思うと二重の意味で哀れに思えてしまう。
知られたら友達の縁を切られかねないので、今後も黙っておくことにする。

（結局、男同士の友情なんて女が絡めば一瞬で崩れ去るもの、か…）
俺が色ボケしているだけとも言えるが、世の真理だろう。
（予定がなくて運がよかったな、大介。…そして俺）

※

こうして、今日の予定は

ユリとランチ
←
大介と遊ぶ
という流れになった。
（…逆の方がいいなー、とか考えてる時点で俺って薄情だよな…）
※
めんどくさい午前授業がジリジリと続き、ようやく待ちに待ったランチタイムになった。
「じゃ、駅前で」
「おう、後でなー」
大介含めたクラスメイト数人に声をかけた後、急いで階段を駆け上がった。
そして、目標のドアを…
ガチャガチャガチャガチャガチャ
「…開かないじゃん！」
とりあえずツッコミを入れる俺。当然扉はビクともしない。右手が痛い。
…今回はユリが先に来ているという可能性はない。
俺が先に教室を出たとき、話しかけてきたクラスメイトたちの相手をしていたからだ。

（ど、どうすれば…）

とりあえずメールを打ってみた。

『屋上のドアに鍵が掛かっているから、他の所にしない？』

一分ほどで返事が着た。

『待ってて』

※

携帯をパカパカ開いたり閉じたり開いたり閉じたり開いたり開いたり。

（…あれ、今閉じずに二回開いたような？）

うん、気のせいだ。

文章表現上は可能でも物理的には不可能だからだ。

で、五分ほどでユリが来た。

全く焦っていない。

「…どうする？」

「待って」

俺の言葉を制し、ユリがポケットに手を突っ込んだ。

中から出てきたのは家や自転車などの鍵の束。

「ま、まさか…」

一本を選び、躊躇することなくドアの前に立つ。

（いくらユリでも…そんな…）

細くしなやかな手に握られたその小さな金属片は、陽光に煌きながら、自らが納まる場所へと吸い込まれていった。
お互いの欠落を補い合うかのように両者がかみ合う。

カチャッ

小さな音とともに、ついにその扉は少女を受け入れた…。

「…って、何でユリが鍵持ってんだよ！」

しかも、家の鍵とかとセットだから、明らかに私物だし。
ユリ。一体、お前は何者だ。

（…誰よりも知っているはずの幼なじみなのが、今はよく分からないよ…）

第２５話：美味しい

「さっきの鍵は、お昼に人が集まってきて落ち着いてご飯が食べられないって先生に言ったらくれたの。屋上は立ち入り禁止だけど、白鳥さんなら大丈夫だろうって」

ユリはすでに先生まで篭絡しているのか。

「…校舎の鍵とかも言ったら貰えそうだ…」

「？　欲しいの？」

「全然！」

慌てて否定した。

普通は無理だろうけど、本当に手に入れかねないところが怖い。

「で、…食べる？」

「うん」

俺の横に座ったユリが、鞄から二段に分かれた小さめの重箱を出した。

小さめとは言っても、多分三人前くらいはある。

「はい」

「…ありがとうございます」

「あ、私の分も入っているから」

「…そうだよね。さすがにこの量は」

下段からおにぎりを一つ取り出して、残りを差し出された。

小さめのおにぎりが四つ。それプラス上段全て。

「残しちゃダメよ？」
「…がんばります」
（俺、ユリに何かしたかなぁ…）
身に覚えがあり過ぎるのが悲しい。
※
腹が破れるつもりで食べようとしたら笑われた。
どうやら冗談だったらしくて安心する。
蓋を取ると、上段にはおかずがいっぱい詰められていた。
煮物、出し巻き、鳥の照り焼きなど俺の好物ばかり。
「美味しいっ！　これも、こっちのも、すっごく美味いよ」
バクバクと食べるのに夢中で、気がつくと重箱はあっというまに空になっていた。
ユリが
「いっぱい食べたね」
「…ごめん、ユリの分少なくなかった？」
「大丈夫。…それに、美味しそうに食べてもらえると嬉しいし…」
「すごく美味しかったよ」
「…ありがと」
片づけをするユリを見ながら、朝から考えていたことを言ってしまおうかと思った。

「ユ…」
「く、果物もあるんだけど食べる？」
「あ、うん。貰うよ」
「…はい」

ヘタの部分をカットされたイチゴが出てくる。
でも、フォークが一本しかない。

「あ、あのね…もう一つ持ってくるの忘れてて。…一緒で、いい？」

チラチラと俺の顔色伺うようにして聞いてくる。
（ああ、もう……！）
本当に可愛い。わざと忘れたんじゃないか、と聞いてみたい！
「も、もちろん、いいよ」

「…じゃあ、はい」

そう言って、顔を横に背けながらユリが差し出してくる。
その手にはイチゴが刺さったフォーク。
（これは…）

「…早く食べなさいよ」
「…うん」

横目で見てくるユリに緊張しながら、あーん、と口を開けていただく。
甘酸っぱい。

「…美味しい？」
「うん」

「そう」
「ユリも食べたら？」
「…言われなくても食べるわよ」
横を向いて俯きながら食べるユリの、頬はイチゴのように真っ赤だった。

第２６話：イチゴ

イチゴを食べ終わって幸せそうなユリを、ちょっと強引にこっちに向ける。

「きゃっ…」
「ユリ」
「な、何…？」

ユリに見上げられるような形になる。
普段はそれほど意識していないのだが、これだけ近いと改めて身長差を実感した。
俺とユリの差は、俺が男でユリが女なんだという証みたいだ。

そのままじっと見つめると、ユリの瞳が潤んできて、頬の赤みが耳まで広がっていった。

ユリは本当に綺麗で可愛い女の子だと思う。顔だけじゃなくて、性格とか色々と考えてもとっても魅力的。学校中の誰よりも、テレビや雑誌に出ているどのアイドルよりも。
こんなに素敵な女の子は、ユリの他にはトウカぐらいしか知らない。

（…そういえば、こんなに真正面からユリに向き合ったのって、どのくらいぶりだろう）

思えば、俺はいつもユリの後を追いかけていた気がする。
この高校を受験したときも、その前もずっと。

でも、それじゃダメなんじゃないかって昨日思った。

トウカが慕ってくれるから。
ユリが待っていてくれるから。

だから、二人に甘えていてばかり。
そんな自分では、昨日みたいに二人が泣いた時、何も出来ない。

「俺、ユリのことが好きだよ。

でも、ずっとユリに相応しくないって思って黙っていた。

なのに諦めきれずに、あの時みたいに後ろから抱きしめたりして、
…そんな自分が凄く見っとも無いと思った。

このままじゃいけないって、どうすればいいのか考えてみた。

それで……」

それで、俺はどうしようと思ったのか。
ユリに相応しい男になるために。
勉強？
ファッションの見直し？
違う。
一番初めにしなければならない事を、俺はまだ一度もしていなかった。
じっと背中を追いかけていたユリと、ここから始めていくために大事なこと。

「それで、…こうやってユリの正面に立つことから始めようって思

ったんだ」

俺の言葉に、ユリの瞳が揺れた。

「……クロ……」

涙が浮かんだ。

何故泣かれるのか、俺には分からない。

俺が情けない人間だからだろうか。

こうしてユリに好きって言っているのに、やっぱりトウカも好きだって思ってるからだろうか。

でも、泣かせたいわけじゃない。

いつか、ユリを泣かせることのない男になりたいんだ。

「……わ、私も…クロに、クロに……」

ユリの瞳から、ついに透明な雫がこぼれた。

その涙を唇で拭い、俺の名前を呼ぶ小さな唇と重ねた。

「ん……」

ユリとの初めてのキスは、涙とイチゴの味だった。

ユリ：涙

『俺、ユリのことが好きだよ……』

クロの言葉に胸がつまる。
嬉しさと申し訳なさで、泣きたくなってしまう。
クロに向き合っていなかったのは私の方だから。

見つめられるだけで体が熱くなってしまう。恥ずかしくて目をあわせられない。
お姉さんぶって、世話をやくような接し方しかできなくて、素直に自分の気持ちを伝えられない。

私はあの日から、あの夜から前に進めずにいた。
クロへの気持ちに気づいたのに、逃げてばかりいた臆病者。
クロが私の背中を見ていたのは、私がクロと向き合う勇気を持てなかったからなのに。

『…こうやってユリの正面に立つことから始めようって思ったんだ』

なのに、クロは自分のせいだって言って、悲しそうで、悔しそうな顔をする。

「……クロ……」

謝らないでほしい。
私のせいで悲しい顔をしないでほしい。

「……わ、私も…クロに、クロに……」

言いたいことがあるのに、うまく言葉にならない。
勝手に涙が溢れてしまう。
好きだって言われているのに、返事も出来ずに泣いてしまう自分が情けない。
こんな女の子だって分かったら、クロも呆れてしまうかもしれない。

（何で私はこんなにダメなんだろう…トウカはいつだって自分の気持ちに素直に行動しているのに…）

昨日の二人のことも思い出して、トウカと自分と比べてしまう。冷たい涙がこぼれ落ちそうになった。

頬に何か温かいものが触れた。
それはそのまま私の唇と重なって、少ししょっぱくて、甘酸っぱかった。

「ん……」

息が漏れる。すぐ目の前にクロの顔があった。
何となく切なそうな顔。唇が熱い。

（……ああ、私、今クロとキスしているんだ……）

自然と目を閉じて、クロを抱きしめた。

触れ合った場所からクロの気持ちが伝わってくるような気がする。
クロが私を好きって気持ち。大切に思ってくれている気持ち。
謝れなかったこととか、泣いてしまったこととか、私の中の色んなものが溶けて消えていく。

『好きって言ってもらえて嬉しかった』
『私もクロのことが好きだよ』
言葉にする代わりに、私の気持ちを込めてクロに応えた。

第27話：鐘

自然と抱き締めあった。
強く、思いを伝えるように。

「…はぁ…」

どれくらいそうしていたか分からないくらい。
ただお互いだけを感じる時間のあと、どちらからともなく唇を離した。

「……キス、しちゃったね」

そう言ってはにかむユリを、もう一度抱き締めた。
やましい気持ちはなかった。

ユリを抱きしめるだけで、十分すぎるほどに気持ちよかった。

※

授業はないのに、何故かうちの学校ではいつもの時間にチャイムがなる。

「あ…。そろそろ行かないと…」

美術部に集合する時間が近づきユリがそう言うが、離れようとしない。俺も離そうとしない。

「あと何分くらい？」

「…この鐘が鳴り終わったら」
「そうか…」
「うん」

鐘の音はすぐに小さくなっていく。すでにほとんど聞こえていない。
でも。

「クロ…。まだ、少しだけ聞こえるよね？」
「うん」
「…聞こえなくなったら、教えて」
「うん」
「…ちゃんと聞いてるの？」
「聞いてるし、聞こえているよ」
「…ばか」

…こうして、ユリは十分弱の遅刻をした。
もちろん、チャイムが全部悪いに決まっている。

※

「黒井、遅いよ！　何分待ったと思ってるんだ」
「ごめんごめん、チャイムがさあ…」
「は？　チャイム？　制服だし、学校にいたのか？」
「うん。で、チャイムが全部悪いんだよ」
「…なんだそりゃ？」
「まあ、分からないなら気にするな。人生なんてそんなもんだ」
「…そうか？」
「そうだ。で、今日はどこに連れて行ってくれるんだ？」
「あ、そうだったな。えっと…」

十分以上待ちぼうけだったというのに、これですっかり水に流してくれる大介。
さすがは俺の親友。
大介はきちんと私服に着替えていて、俺は制服だというのがすごい恥ずかしいが、そこは妥協しないといけない。
…そもそも一時半にここに集合だと、俺は家に着替えをしに帰る時間も無いんだけど。
そこんとこをちょっとは考えてこいよ、大介。
まあ、天然だろうから文句は言わない。俺たち親友だし。

※

「ところで大介」
「何？」
「お前を親友と見込んで頼みがある」
「おう、何だって言ってくれ！」

大介に先導されながら、話をする俺たち。ちょうど聞きたいことがあった。

「あのさ、…もし恋人とかできたら、どんな態度をとるべきかな？　こう、気をつけた方がいいこととか」
「恋人？　もしかしてできたのか？　俺に黙ってつくったのか！？」

俺の言葉に大介が劇的な反応を見せた。

「いや、その、もしもだよ、もしも…！」
「…そうか。もしも、か…」

慌てて取り繕ったが、正直、今のはかなり怖かった。いったい何な

んだったんだろう…。

「じゃあ、一番大事なところから言うぞ？」

「あ、ああ。頼む」

すっかり元の大介に戻っているところが、逆に怖かった。

「多分お前なら平気だと思うが、これは一番ダメ、って行動を言うぞ？」

「お、おう」

「それは…」

「それは…？」

何故か妙なタメをつくられる。

はやく言えよ、気になるだろ！

「それは、もちろん…」

「う、うん…」

ゴクリ

「もちろん、浮気をしないことだ！」

「！」

「まあ、当然って言ったら当然だろ。これは一番ダメだ、って参考にならないか！　ははははは…」

「……」

「ははは…は…は？　あれ、ごめん、つまんなかった？」

「…俺、真面目に聞いてんだけど」

「ごめん。一応、真面目に答えてるんだからそんなに怒るなよ…。他にも教えてやるから」

「…ああ」

別に、そんなに怒ってはいない。
ただ顔の筋肉が強張っているだけだ。

※

大介の話はけっこう常識的な内容だった。

・わがまま、無茶なことを言わない
・相手の意思を尊重する
・相手が気にしていることを指摘しない
・誤解や不安になるようなことをしない
などなど。

…なんか、耳が痛いです…。

第２８話：大介の案内

「まあ、結局さ、優しくするのって大事なんだと思うんだよ」
「う～ん…？　女の子に優しい男なんて、いっぱいいるだろ？」
大介の言うことにちょっと納得できない。
ユリもトウカもモテモテだから、優しくない男の方が珍しい。
「いや、そうなんだけど。でも、やっぱり女の子は好きな人に優しくされると『大切にされている』『愛されている』って嬉しくなるもんなんだよ」
「そうなのか…」
「とにかく、黒井だって好きな相手に優しくしてもらったら嬉しいだろう？」
「もちろん」
「じゃあ、同じように考えればいいんだよ」
「…そんなもんか」

優しくする、ねえ。
昨日今日と色々と反省したばかりだが、やはり急に態度を変えるのは難しい。
頑張っていても、ついつい、今までどおりに振舞ってしまう。今朝の電車の中とか。
（…あれは欲望に負けただけな気もするけど、一応、今後の目標その１だな）
「後は…。『男らしさ』、かな」
「『男らしさ』？」
「黒井は『男らしさ』ってなんだと思う？」

「そうだなぁ……」
格闘家とかが頭に思い浮かぶ。
あるいは、以前テレビで見た社長とか。
すごく格好良かった。男らしいと言えるだろう。
「喧嘩が強いとか、仕事が出来て決断力があるとか？」
「ふっ、ありきたりな答えだな。想像力が足りんよ」
…余計なお世話だ。
「よく考えてみろよ。そいつらは本当に男らしいか？」
「…男らしい奴もいる」
「だが、男らしくない奴もいる」
確かに。
「…じゃあ、大介の言う男らしい男って何だ？」
「言うのは簡単だけど、なるのは難しいぜ」
大介がまたもったいぶる。つまんねえこと言ったらキックだ。
「早く言え」
「焦るなよ。つまり俺が言う『男らしさ』ってのは、『いざと言う時に頼りになる』ことさ」
「…『いざという時に頼りになる』」
「彼女が困った時に支えてやれる男って、カッコいいだろ？」
「…確かに」
俺の目からウロコが落ちた。

確かに男らしい！　あるいはカッコいい男だ！
…だが…。

「すごく難しいな、それ」
「…そうなんだよ」

しょんぼりする大介。だが、ここでくじけているヒマなどない！

「いつか、そんな男になろうな！」
「…おう！」

俺たちは誓いの握手を交わす。
努力目標その2に決定した。

（…どうすりゃいいのか、皆目見当がつかんがなー）

※

「で、ここ何？」
「ショッピングモール」

大介についていった先は、三階建てで中央が吹き抜けになっている大きなショッピングモールだった。二階から入って、一階を見るとど真ん中にステージみたいなものがあった。多分ショーとかに使うんだろう。

「で。ここで買い物をしようと？」
「いや、昨日からここで面白い催し物をしているって聞いてさ」
「ふーん…。あのステージか。何してたんだ？」
「演歌歌手が歌を歌っていたらしい」

「すまん、急用を思い出したから帰る」

そんなもの、かけらも興味が無い。現代に生きる高校生として当然の反応だ。

だが、そんな俺を大介は引き止める。

「待てって！　明日までの三日間、毎日違うことするらしいんだよ、ちょっとくらい覗いて行こうぜ」

「つまらなかったらすぐに帰るぞ」

「そしたら他のところに案内するよ」

「…まあ、それでもいいか。で、何時から？　下行くのか？」

「二時からだって。もうすぐ始まるから急いで急いで」

「…面倒だなあ」

※

ステージのすぐ側の席は、とっくに埋まっていた。

客を見ると俺と同じ黒い制服の奴らが多い。

うちの高校の男子生徒が今にも柵を乗り越えんばかりだった。

「…なんだあいつら」

「今日の出演者のファンだろ」

「ファン？　ああいう連中がファンってコトは、女の子なのかな」

そうだったら少しは興味が出るが。…いや、浮気じゃないよ？

「多分そうじゃない。…そういや、友達が今日のステージは絶対に来いって、熱心に誘っていたなあ」

「あの中いる？」

「う～ん…。あ、あれだ」

大介が指差した先にいたのは、制服の集団とはまた違う団体。
ピンクの半被をつけた連中だった。
その一番前で一人の男が何かを指示している。

「いいかぁ、出てきたら俺が手を上げるから、そしたら一糸乱れぬ声援で…」

多分、あれもファンだろう。

「…あっちの方なんだ」

末期的とは言わないが、大介の友人はかなり熱狂的な人のようだ。

「あの一番にいる奴だよ」
「……」

そういえば、こいつも白鳥会の会員Ｎｏ．１００なんだよな。類は友を呼ぶというか。

「…最近、白鳥会どうなった？」
「あ、興味ある？　この前、ようやく幹部会に初めて参加できたんだけど…」
「すまん、もういい」

幹部会って、つまり幹部ということか…。もうボクお腹いっぱいです。

（ああ…、今日ユリとキスしたとか絶対に言えないなぁ…）

人に言えない二人だけの秘密ってステキ♪
とかトウカなら言いそうだが、実際に命の危険を感じる身としては…。

「はぁ…」
「どうしたの？」
「なんでもないよ」
「そう。あ、そろそろ始まるみたいだよ」

ステージに視線を向けるがまだ、何もない。

「何もないぞ」
「違う違う、あっち」
「え？」

指差された方向は親衛隊方面。
内輪と垂れ幕の用意をして準備万態。
あ、名前みたいなのが書いてあるな。

「えー、っと……」

急に嫌な予感がしてきた

「あ、出てきた」

大介の声を聞き、またステージ上に目を戻す。
照明を一身に受ける、俺とたいして変わらない年頃の女の子。
ラメが散っている薄いピンクの衣裳。その中に収まっているのは小さな肢体と、それに不釣合いなサイズの胸。
茶色がかった髪は触るとふわふわしていて。

キラキラした瞳に見つめられるとドキドキして。
笑顔を見ると幸せな気持ちになれる可愛いアイドル。

「ト…」

「せー、の！」
「「「ＴＯＫＡ≪トーカ≫ちゃ～～～ん！！！」」」
『は～い♪　みんな～、こんにちは～～～～！！』
「「「こんにちは！！！」」」
ステージの上にいたのは、俺の良く知っている女の子だった。

第２９話：握手会

「いやー、可愛い子だったね。すっごく明るくて、見ていてこっちが元気になってくるよ」
「……ソウダナ」
「あれは人気が出るのもわかるなぁ、でも、今まであんな子がいたって知らなかったよ」
「……ソウダナ」
「あ、この後握手会あるって言っていたけどどうする？　記念に並んでみる？」
「……ソウ……なにぃ！？　握手会！？」
「…話聞いてなかったの？　写真集を今度出すから、その記念、とか言ってたけど」
「しゃ、写真集！？」
「…本格的に聞いてなかったようだね。興味なかったのか。ごめん」
「いやいやいや！　大アリだよ！　並ぼう！　その握手会に是非並ぼうぜ！」
「…黒井…、俺に気を使ってそんなに、無理しなくても…」
「いいから行くぞ！」
「うわあっ！？」

グダグダ言う大介を引っ張って歩き出した。

「あ、黒井」
「何だ？」
「握手会、やってるのあっち」
「……さあ、行こうか！」
「……見事にスルーだね」

※

ピンク半被の集団とうちの高校の奴らが行列作っていてすごい長蛇の列となっていた。
さっそく並んで待つこと一時間。ようやく俺たちの番が来た。
少々気まずいので、大介を前に押し出し後ろに隠れる。

「さっきのステージ素晴らしかったです！」
「ありがとうございます、これからも頑張っていきます！」

握手を交わして大介が離れる。
で、俺が前へ。

「…頑張ってください」
「ああっ！！」

驚きの声を上げるトウカ。…そんな反応していいのか？
とりあえず、何事もなかったかのように続ける。

「…応援してます」
「あっ、ありがとうございます……頑張ります♪」

気を取り直したようで、笑顔を浮かべて握手をしてもらった。
ついでに一言。

「写真集も買います」
「それはっ、あのっ……ありがとうございますぅ…」

こうしてアイドルと俺とのささやかな交流が終わった。

「トウカさん！　大好きです！！！」
「えっ、あ、ありがとうございます…」

ちょっと長く話しすぎたかとも思ったが、すぐ後ろの奴がはた迷惑な大声を出して注目を集めてくれた。ラッキー。
まあ、危険は無さそうだし、いざとなったら親衛隊やらスタッフがすぐ止めるだろう。俺も遅ればせながら加わることになるだろうな。

…しかし、やっぱりトウカも凄いなぁ…。

第３０話：運命の男（前書き）

ところで、実は『ノクターンノベルズ』というサイトで『いたずら』という作品を連載しています。
そっちは１８歳未満閲覧禁止作品になっていています。
基本のストーリーは同じですが、１８歳以上で興味がある方は覗いてみてください。

Ｒ１８の『いたずら』と、全年齢の『イタズラ』。
両作ともエントリーしているので、よかったら応援よろしくお願いします。

第３０話：運命の男

「おーい、黒井ー！」

大介を探していると、ピンクの集団に混じっていた。
隣は先ほど号令をかけていた奴だろうか？
あんまりお近づきになりたくないが、ばっちり目が合ってしまったので、ここでスルーはできない。

「…何してんの？」
「ほら、さっき言ってた俺の友達。ちらっと聞いてみたけど、ＴＯＫＡちゃんのデビュー当時からのファンなんだって」
「水岡祐樹です」
「あ、黒井夢です」
「黒井がＴＯＫＡちゃんに興味あるなら紹介しようかと思って」
「え～っと…」

それはちょっと、ありがた迷惑かな…。
でも、デビュー当時の話とかファンの声とか聞いてみたいかも。
トウカが恥ずかしがってなかなか教えてくれないんだよなぁ。

「じゃあ、デビュー当時の話を教えてもらえます？」
「いいですよ。…あれは、僕が中学二年生の夏でしたね。たまたま道を歩いていたら目の前で雑誌の撮影をやっていたんですよ」
「雑誌？」
「女の子向けのファッション誌です。それで、初仕事としてモデルをやっているトウカさんを見かけましてね」
「へぇ…」

最初はモデルだったのか。スカウトされたとか、初仕事で緊張するとか聞いたけど、詳しい内容は結局教えてもらえなかったんだよね。

「で、その時ですよ。…僕が運命を確信したのは！」

「…は？」

「あの時の素晴らしい笑顔を見て、彼女はこれからスターダムを駆け上がると確信した僕はすぐにファンクラブを結成し、雑誌を本屋で買占め、事務所に紫のバラを送りました。もちろん匿名で」

「…」

「その後も事務所を問い詰め、ネットを頻繁にチェックし、ＴＯＫＡちゃんの仕事には全て可駆けつけて応援していたのです！」

こ、こいつは…。

「周囲の人間に止められても逆に説得をして、彼女の素晴らしさを伝え、今では家族揃ってファンクラブ会員、そこの連中も先鋭中の先鋭を厳選し親衛隊となった奴らたちです。っふ、苦労しただろうって？　こんなもの、苦労となんて言いませんよ。そう、彼女は僕にとっての女神ですから」

もちろん、俺は何も言っていない。

「彼女のためになることをするたびに、僕と彼女の距離が近づいていく…この前も文通をしましたしね」

それは…ファンレターの返事、とかじゃないのかな？

「……えー、あー、大体分かりました。ＴＯＫＡちゃんは凄い人気なんですねー」

「人気だなんて！　僕は彼女のことを…」

「で、今日は握手とかできて凄くいい日だったんですね？」
「……」
「あれ？」
「…おい、黒井」
何故か大介が俺の肘を引っ張った。ヒソヒソと話しかけられる。
「こいつ、並んでないんだよ」
「え？　どうして？」
「…恥ずかしいからじゃないの？　他の隊員は並んでたし」
「…そうなんだ」
なんかもう、ファンの心理って分からんな。
だが、水岡は怖い奴かと思ったら以外とシャイらしい。俺もその気持ちが分かるので、ちょっと好感度アップ。
「水岡。ケータイ交換しない？」
「…いいんだ…僕は彼女と結ばれる運命なんだから…握手程度で喜ぶ愚民達と一緒に並ぶなんてプライドが…」
「…み、水岡？」
「え？　あ、ケータイですか。いいですよ」
どこか遠くを見ていたような表情から、普通の少年のソレへと変わる。
自分のケータイを取り出して、番号とアドレスを交換したのだが
「では、今後もよろしく。…Ｎｏ．０１１２３」
は、早まった！　明らかに何か大きな失敗をしてしまった！
ニヤリと笑う水岡から、俺はそそくさと退散した。

※

…ユリとキスしたり、トウカの仕事を初めて見たりといいことはいっぱいあった。
だが、大介の話や、水岡の存在が見え隠れしてしまう。

結局、俺の土曜は幸せ一色とは言えない、微妙な色合いに染まって終わりとなった。

（いつものように、ラブラブでほのぼのとした日常に戻りたい…）

帰りに買い物をすませた。買った物の中にあるミカンは、今度、ユリと昼飯を一緒に食べる時に持っていくつもりだ。
そして、飯を簡単に済ませるとさっさと寝た。
寝てばかりで最近の高校生らしくないとか思うが、毎日の精神的疲労によるものだと判断してほしい。

※

すっかり寝付いた後、俺のケータイに入っていた二通のメール。
それをチェックしていなかったことを、後悔することになるとは夢にも思わなかった…。

トウカ：伝説のはじまり（上）（前書き）

トウカの過去話です

トウカ：伝説のはじまり（上）

中学校に上がってお姉ちゃんとクロちゃんのクラスに遊びに行くと、必ず「白鳥さんの妹」と言われるようになった。先生もみんな「白鳥姉妹の妹」の方で覚えている。
勉強や運動で頑張っても、「やっぱり白鳥さんの妹ね」って感じで納得されてしまう。

多分、お姉ちゃんが凄すぎたんだと思う。
もちろんお姉ちゃんのことは好きだし、褒めてもらっているんだってことも分かる。
でも、クロちゃんにも「妹の方」って思われているのかな？
やっぱり、お姉ちゃんが基準なのかな？

※

「ねえ、あなた、芸能界とか興味ない？」

買い物をする為に、友達二人と一緒にちょっと遠くまで足を伸ばしてみた。
どっかに寄っていこうって話をしていた時、綺麗なお姉さんに声をかけられた。

「ふえ！？」

突然のことに驚いてしまう。

「私、こういうところで働いているんだけど、デビューしてみない？」

そういって差し出された名刺には、けっこう有名な芸能事務所の名前が書いてあった。
木下久喜子≪きのしたくきこ≫。タレントさんのマネージメントというのをしている人らしい。

「あなたには光るものがあると思うのよ。アイドル、なってみたいとか考えたことないかしら？」
「え？　え？　ええ？」

わたしはうろたえてしまってろくに返事も出来なかった。
一緒にいた友達が代わりに相手をしてくれて、話も聞いてくれた。
とりあえず返事は今すぐでなくていいから、その気があるなら名刺を持って事務所に顔を出してほしいと言われて、そのマネージャーさんと別れた。
多分、緊張のあまり半分も話を聞けていないって分かったんだと思う。

※

「すごいねトウカちゃん！」
「あ、ありがとう…」
「トウカちゃんなら絶対人気出るよ！　他のアイドルよりも断然可愛いもん！」
「え、そ、そうかな…」
「そうだよ！」
「私、今の内にサイン貰っちゃおうかな～」
「あ、じゃあ私も私も！」

そんな感じで、わたしはちょっといい気になっていた。

（アイドルか～。クロちゃんに言ったらどんな顔するかな～♪）
ウキウキした。
これでもう「妹の方」なんて思えなくしてあげるのだ。
日本一のアイドルになって、わたしにメロメロにしてあげちゃおう！
そう思った。
でも、次の一言で気が重くなってしまった。
「あ、そうだ！　優里様と一緒にアイドル姉妹とかどうかな？」
「え、お姉ちゃん…？」
どうしてそこでお姉ちゃんが出てくるのだろう。
「それいいかも！　二人共すっごい美人だし、あっという間に全国クラスのアイドルになるかも！」
「私たちの学校から二人もアイドルが出るとか、すごいね！」
「…お姉ちゃんも、アイドルに…」
盛り上がる二人とは裏腹に、ションボリしてしまった。
（わたしがスカウトされたのに…）
…わたしの友達なのにお姉ちゃんのファンなんだ…。
何をやってもお姉ちゃんに敵わなくて、ちょっと泣きそうになった。

トウカ：伝説のはじまり（下）

「…クロちゃぁ～～ん…」
「トウカ？　何かあったの？」
「…うん…」

家に帰る前にクロちゃんに泣きついた。
何かある度にクロちゃんのところに行くので、手慣れた感じで対応されてしまう。マニュアルとか作ってるのかな？と、ちょっとバカなことを考えてしまった。

「うぅ～…」
「ほら、言ってくれないと分からないよ？」

ベッドで横になって漫画を読んでいたらしいが、きちんと向き合って慰めてくれる。
こういうところが優しくて大好き。

「トウカね、トウカね…」
「うん」

クロちゃんに優しくされると、つい子供っぽくなってしまう。気をつけないと昔みたいに自分のことを『トウカ』って呼んでしまう。
もっと大人っぽくなりたくて、他の人の前だと平気なのになかなか直せない。

「あのね…トウカね、スカウトされたの…」
「スカウト？」
「うん、アイドルの…」

「ええ！？　す、すごいじゃん！　え？　でもなんで泣いてるの？
嫌だった？」
「ううん…」
「？？？」

よく分からないという顔をするクロちゃん。
自分で言ってても変な説明だと思ってしまうけど、他になんて言えばいいのかわかんない。

「あ、あのね、クロちゃん！　トウカ、アイドルになれると思う？」
「え…、もちろん、トウカならなれると思うよ！」

力強く頷いてくれる。嬉しい。
（でも、お姉ちゃんもアイドルに向いてるって言うんだろうなぁ…）
みんなそう言うから、クロちゃんが言う前にわたしから聞いた。

「ねぇ、クロちゃん…」
「うん？」
「…お、お姉ちゃんはアイドルになれると思う？」
「え、ユリがアイドルに？　う～ん……」

驚いた顔をした後、何故か悩み始める。

「ユリは…、無理じゃないかな？」
「ええええっ！？　なんで？　どーして？」

クロちゃんの返事に、びっくりしてしまった。
だって、お姉ちゃんだよ？
わたしの目から見てもあんなに綺麗だって思うのに。

「えー…、だって、ユリってテレビ向きの性格じゃないって言うか。目立つの嫌がりそうじゃん」
「…それは、そう、かも…」
確かにお姉ちゃんの性格だとそんな気もする。
「でも、トウカならきっと凄いアイドルになれると思うよ」
「…クロちゃぁん…」
胸の奥がキュンとした。
みんなと違って、ちゃんとわたしのことを見てくれている。
お姉ちゃんのことも見ているんだろうけど、わたしたちのことを「白鳥姉妹」なんて括ったりしない、クロちゃんの言葉。
その一言でわたしは舞い上がってしまう。
「あれ？　もしかして芸能界が怖いとか、ユリと一緒にデビューしたいとかそういう話？」
「ううん、もういいの。ありがとう♪」
「うわっ、ト、トウカっ！」
わたしはクロちゃんに抱きついた。
子供っぽいって思われるかな？
でも、嬉しくても他になんて言えばいいのかわからない。
何をしてあげたら喜んでくれるのか分からない。
（クロちゃん…大好き…）
そう言いたいけど、まだ伝えるのが怖いから。
だから、こうすることしか、わたしには出来ない。

トウカ：協力者

「今日はお疲れ。次の仕事の資料取って来るからちょっと待っていてね」
「はい！」
木下さんが休憩室から出て行って、ようやくわたしは一息ついた。
お仕事が一段落ついて緊張がほどけると、つい顔がニヤけてしまった。

（きゃあああ！　クロちゃんに見られちゃった～♪）

すっごく恥ずかしいけど、やっぱり嬉しい。
布団を頭からかぶってゴロゴロしたくなるような気持ち。
でも、事務所なのでガマン、ガマン。

「あぅぅ～、ふにゅぅ～…」
「……何か変な鳴き声がすると思ったら、やっぱりトウカちゃんね」
「ふぇ？」
声をかけられた方向を見ると、すっごく綺麗なお姉さんが立っていた。
事務所の先輩の茜さんだ。
「おはよー」
「ふにゃあ！　おお、おはようごじゃ…ございます」
恥ずかしいところを見られちゃった。

「あらあら…。可愛いお顔が真っ赤っかね」
「ふにゅ、う、うぅ…」
「うふふ」

わたしを見て楽しそうに笑っているとおり、茜さんはけっこうイジメっ子。
何故かわたしを気に入っているらしくて、よくからかわれる。
でも、優しくて頼りになる所もあって、嫌いになれない性格をしている。

「嬉しそうな顔しちゃって。『彼』と何かあったんでしょ？」

『彼』とはもちろんクロちゃんだ。
詳しく話すのが恥ずかしいので、単純に好きな人ってことだけ茜さんに言っている。
昨日のこととかも思い出して恥ずかしいけど頷いた。

「…ひゃい…」
「あら、その顔も可愛いわね～」

いい子いい子されてしまう。
実は、わたしは以前から茜さんにいろいろと相談にのってもらっていた。
お仕事のこととか、…恋愛のこととか。
しばらく元気がなかった『彼』の話とか、いっぱい聞いてもらって迷惑かけたと思うし、アドバイスもしてもらった。結局あんまり活かせてなかったけど…。

「…あ、ありがとう、ございました…」
「いいのよ、大好きなトウカちゃんのためだもの。相談してもらっ

て嬉しいわ」
「茜さん…」
本当に苦にしていない、という笑顔で言われるとこっちも嬉しくなる。
（茜さんっていい人だな～）
「で、次のお悩みは？　あるでしょ？　もちろんあるのよね？」
「…茜さぁ～ん…」
（…この押しの強ささえなければ、本当にいい人なのに…）
で、結局わたしは茜さんに相談にのってもらうのだった。

第３１話：神様、感謝します！

「ちゅ～♪」
「…んむ…？」

妙に息苦しい。唇に柔らかい何かが当たっている。
それはすぐに離れたのだが、もの凄く身の覚えのある感触で…。
（い、今のは…）
おそるおそる目を開いた。

「あ、クロちゃん、おはよ～♪」
「…おはよう」

大変ご満悦な様子の幼なじみが、俺の上に寝そべっていた。

※

「…何でトウカが俺の布団の中にいるの？」
「んみゅ？　クロちゃんが寝てたから、起こしてあげようと思ったんだよ？」

なんでそんな当たり前のことを聞くの？みたいな顔されてしまった。

「…わざわざ俺の上に乗って？」
「えへへ～、クロちゃんの寝顔可愛くって、キスしたくなっちゃったの～♪」

（最初の感触はやはりトウカのキスか…）
どうやらそれで目が覚めたらしい。

「にゅふふ、ぬくぬく～♪」
「って、こら！　離れなさい！」

トウカが抱きついてきた。
胸の感触は豊かで。足の感触は絡みつくように。
（…足はヤバい！　そこは、そこはやめてくれっ！）
何故かって、言わなくても分かるだろうけど言っておく。

起床時の男の生理現象だ！

「…本当にダメだから離れなさいっ！」
「や～ん♪」
「や～んっじゃない！」
「にゃ～ん♪」
「それもダメっ…！」

その後、あくまでも体を押し付けようとするトウカとの聖域を巡る争いが続いた、とだけ言っておこう。
結局負けたんだけどね。

「ふにゃああ！　クロちゃんの、エッチィィーーーッ！」
「誤解だーーーっ！」

…寝起きにグイグイ体を押し付けて、キスまでしたのはトウカじゃないか！

※

真っ赤な顔でちょっと距離を置いてついてくるトウカと共に一階へ。

台所に向かうと、いい匂いがした。トントントンとリズムよく響く包丁の音。
そして、エプロンをつけて鼻歌交じりに料理をするユリの後ろ姿。
「あ、起きたの？　もうちょっとかかるから、座って待ってなさい」
（…いつの間に俺の願いが叶っていたのだろう…）
拝啓、神様。
ベッドの中まで起こしに来てくれる幼なじみと、朝食を作ってくれる幼なじみって最高ですよね。

第32話：ハ、ハーレムなのか！？

「美味しかった？」
「もちろん！」

ユリのご飯をたらふくいただき、まったりとした時間。
いやー、こんな休日もいいもんだ。
というか、美少女二人に囲まれている俺って…。
（こ、これがハーレムって奴か…！）
男ならば一度は夢見るあれだ。
こんなに幸せでいいんだろうか。

「ねえ、クロ」「ねえ、クロちゃん」

「ん？」

突然二人に声をかけられた。何だろう？

「あの、ね…」
「一つ聞いていい？」

二人とも笑顔でいるんだけど、なんか、なんか…。
（妙な迫力が…）

「な、何かな…？」
「別に私はかまわないんだけど…、まあ、一応確認なんだけど。…冬歌が…」
「あのね、あのね。えっとぉ…、…お、お姉ちゃんが…」

「「なんでここにいるの？」」

「え？」

そんなこと聞かれても、俺、何も知らないよ？

※

「昨日、メールしたじゃない。お弁当の食材買うから付き合いなさいって」

「トウカのメール、見てないの？　お仕事休みだから、デートしようって」

「…ちょっと、ちょっとだけ待って…」

「「…うん」」

慌てて二階へ走る俺。

枕もとの携帯を手に取ったのだが。

「電源、切れてる…」

そういえば充電するのを忘れていた。

急いでコンセントに挿しっぱなしの充電ケーブルを繋ぐ。

電源を入れてメールボックスから新着メールの問い合わせ。

すぐに何通か来た。一番下のメール、二つを開く。

４／２３　土　２２：００

白鳥優里

『明日買い物つきあって』

クロのお弁当の材料を買いに行きます。

４／２３　土　２２：０１
白鳥冬歌
『デートのお誘い』
明日、トウカとデートしてください。
恋人らしく外で待ち合わせもいいなって思ったのですが、迎えにいくのも素敵かなと思って迷ってます。
クロちゃんはどっちがいいですか？
あと、行きたい場所とかもあったら教えてください。

「…マジか」

あ、一応言っておくと、トウカはメールだと文章が丁寧になる癖がある。
以前ギャル文字のメールをもらった事もあったが、解読不可能だと説得したらこうなった。
（…っていうか、俺返事してないんだけど…）

その後送られたメールも読むと、返事をしなさい！と怒っているユリと、ダメですか？と悲しそうなトウカという組み合わせだった。
で、最後のメールには、朝になったら直接返事を聞きに来ると書いてあった。
つまり、今。

（神よ…、私が間違っていたというのか…）

二人からのデートのお誘い、どうしよう…。

第３３話：両手に…

「……メール、見た？」
「クロちゃぁん……」

下に戻ると不安そうな二人が出迎えてくれた。
お互いが俺を誘っていたと知ったのだろう。
俺が出す結論を待ってくれている。

でも、ここで選べるようならそもそも二人に告白しませんよ？

目を逸らしながら、禁断の呪文を口にする。

「……えっと、『三人でお買い物デート』、……とか」

「「……」」

反応が無い。
……すいません、二人の様子を直視できないヘタレな僕ですいません。
僕が間違っていました。深く反省します。
お願いですから何か言ってください。

「……すみません、本当にすみません。調子乗りました、もう少しだけ、もう少しだけ時間を……」
「いいわ」
「いいよ」
「……へ？」

い、今なんと？
唖然としている俺を尻目に二人で今日の予定を話し出す。
「冬歌。行きたい場所あるの？」
「んー、特にないかなぁ。ちょっとブラブラして、一緒にお昼食べたりお店覗いたりしたい！　買い物は帰りでいいんだよね？」
「そうね。荷物があっても邪魔だし、タイムサービスを狙ったほうが安いから」
「あ、そうだ！　この前素敵な喫茶店を見つけたんだけど、そこ行きたい！」
「……別にいいけど、今行きたい場所はないって言ったばかりじゃない」
「えへへ。ごめんね、お姉ちゃん」
「はいはい。それでいいわよね、クロ？」
「へ？」
ユリがいつの間にか主導権を握っていて、俺に一応の確認をしてきた。
「クロちゃん、ダメ？　すっごく可愛いい喫茶店なんだよ！　……カ、カップルも多いお店何だけどぉ……」
トウカが頬を赤らめつつ不安そうな顔をするが、もちろん反対なんかしない。
驚きすぎて思考が止まっていただけだ。
「ダ、ダメじゃない！　ダメじゃないけど！　……二人とも、いいの？」
「……だって」
「クロちゃんだし……」

「「しょうがないかな、って」」

「……スミマセン、アリガトウゴザイマス……」

俺ってどんな風に思われてるって、怖くて聞けなかった。

……やはりヘタレか？　ヘタレなのか？

※

「……ここなんだ」

着いた場所は、昨日行ったショッピングモールから少し離れた繁華街だった。

つまり、俺とユリの高校の最寄り駅周辺。

（……知り合いに会いませんように……）

今の状態を誰にも見られないよう、神に祈りを捧げた。

ユリは俺の右手をとり、軽く握っている。

春物のブラウスにスカートという格好で、学校の生徒の目を考えて帽子をつけている。

その様子が清楚可憐で、お嬢様という言葉が大変よく似合う。

あと、歩いているので時々二の腕とかが触れます。幸せです。

トウカは左側、腕を組んで歩いている。

カットソーに、惜しげもなく足を出したミニ。こっちも昨日の今日なので一応サングラスをかけているが、それでも十分にアイドルのオーラがあった。

なんかね、さっきから柔らかい感触がするんだ。最高です。

で、美少女二人をはべらせている？冴えない男が、俺。
（……すげえ。みんな見てるよ……）
最初にユリかトウカのどちらかに目を向けて、真ん中の凡人を無視して、反対側の美少女を見て驚く。
最後に俺の顔を確認するが……通り過ぎる人全員に睨まれている気がした。
彼らとは何の面識も無いが、気のせいじゃないと思う。
（これが幸福の代償か……いつか刺されそうだ）
これからは人ごみと背後に気をつけよう。

第３４話：ニャンとワンだふる

喫茶店は軽食も食べられるそうなので、先にブラブラすることにした。
なかでも二人が喜んでいたのはペットショップだった。

「可愛い～♪　あ、ねえねえ、クロちゃん、この子こっち見てるよ！　こんにちは～」

トウカが立ち止まったのはゴールデンレトリバーの子犬。
柵に寄りかかり尻尾をブンブン振って大喜びだ。こういう愛想のいい子は俺も大好きである。

「本当に嬉しそうだね。撫でてほしいんじゃない？」
「え、い、いいの？　怒られないかな？」
「ケースから出ている子なら撫でても大丈夫って書いたあったよ」
「そうなの？　ありがとうクロちゃん！」

満面の笑みでトウカが子犬を撫で始める。

「うわぁ、毛並み柔らかい！　……ふふふ、くすぐったいよ～」

子犬がトウカの手をぺろぺろと舐めている。こういう光景を見ていると和むなぁ…。

「この子、クロちゃんみたいだね。可愛いな～♪」

（……どっちかというとトウカっぽい気がするんだけど……）
ま、いいか。

※

「……」
「……ニャー」
「……」
「ニャウ……？」
「……」
「ニャーン！」
「……に、にゃ……」
「あ、ユリはその子がお気に入りなんだ？」
「！　ク、ククク、クロ！？」
「え、そうだけど？　なに？」
「べ、別に何もないわ！　気にしないで！」
「？？？」

（何か様子が変だけど何かしたっけ？）
見つめると目を逸らされた。

「あ、…と、冬歌は？」
「向こうにいるよ」

ちょっと離れたところでさっきの子犬とまだじゃれている。
お腹をごろんと晒して幸せそうだ。……もちろん子犬の方だよ？

「もうちょっと見ててもいいんじゃない？」
「そ、そうね」
「で、ユリが見てたのはこの子なんでしょ？　へえ、アメリカンショートヘアか」
「…何よ」

「何でもないよ。可愛いね」
ただ、ユリによく似合っているなと思っただけだ。
「…まあ可愛いけど、野生じゃ生きていけなさそうでクロっぽいわね」
「…」
俺たちが見ている前で、マイペースに毛づくろいを始めた黒猫を見て思った。
（多分、ユリそっくりじゃないかな？）
声をかける直前の光景を思い出して、試してみることにした。
「……俺、ちょっと他のも見てくるよ」
「わかったわ」
ユリの視界から離れて物陰に隠れる。
で、こっそり監視。
「……ニャーン！」
「……」
黒猫がまたユリに近づいていく。
ユリもキョロキョロと周囲を確認した。
「ニャーオゥッ！」
「……にゃ、にゃー！」
「……やっぱりそっくりじゃん……」

俺が消えた途端会話を始めるあたり、典型的なツンデレである。
……ニャンデレかな？

※

そんな訳で、可愛い四匹の姿を見れて俺も大変満足だった。

第３４話：ニャンとワンだふる（後書き）

ペットショップは可愛いですよねー。
ニャンデレさんは猫喫茶に居そうなイメージがあります。

第３５話：ユリと一緒に

「うう…絶対、また来るからね！」
「ワン！　ワンワン！」

どこに行くの？
子犬はつぶらな瞳でトウカを見上げ、追いかけようした。
だが、首輪に繋がったリードが限界までのび、子犬はそれ以上進めない。

「ワォーン！」
「絶対、絶対また来るから！」

トウカと子犬の悲しき別れがあった。
そしてその陰に隠れる、もう一つの物語。

「……ニャン」

ユリと黒猫の、言葉少ない静かな別れ。

「……あ……」

黒猫は最後に一瞬だけ頭を擦りつけると、潔く背を向けた。
そして、自分のいるべき場所へと帰っていく。

「…ばいばい…」

小さな背中へ向けて、ユリは小さく手を振った。

※

（……ごめん、2人とも、いつまでやるの……？）

「やっぱり可哀そうだよー！」

「……可愛すぎる……」

二人がまたペットショップに戻って行くのを、かれこれ五回は見た。

「長すぎる……」

※

こうして二人がペットショップを満喫した後、当初の予定通り喫茶店へ。

店内は白を基調として所々に花やアンティーク風の調度品が置かれており、日本では数少ない本格的な喫茶店のようだった。

時刻は昼をまわったくらい、混んではいたがちょっと待てば入れる程度。

ちょうどいいので先にメニューを決める。

（うわ…。紅茶とケーキがすごい）

それぞれで見開きページを使っている。

種類も多いし説明もしっかりと書かれているのだ。

（…紅茶とかは後にして、少し腹に溜まるものが食べたいなぁ）

さっき食べたが、二人を待っている間に小腹がすいたのでケーキじゃなくてしっかりしたものがほしくなった。

（何しようか…）

クイクイ

「ん？　…ユリ？」

俺の袖を引っ張り、こっそり相談された。

「サンドイッチとフルーツサンド食べたいんだけど、サンドイッチ一緒に食べて」

「いいけど、なんでコソコソしてんの？」

「…ばか」

ぷいっとそっぽ向かれてしまう。

（…なんで？）

※

「三名様ですね？　こちらの席へどうぞ」

シックな制服（どんな制服かはご想像にお任せしますが、アレでした。実物を初めて見た）に身を包んだウエイトレスさんに案内されて四人席へ。

二人ずつ分かれて座るので、俺が一人で座ろうとしたのだが

「クロは、ここ」

さっさと座ったユリが俺の手を引いて隣に座らせた。

「え、な、なんで？」

「……サンドイッチ、一緒に食べるって言ったじゃない」

俯きながら話すユリは、やはり可愛かった。

第３６話：逆襲のトウカ

「にゃああ！　トウカも座る！」
「うわ、ちょっ、無理だって」
「やだ！」
「冬歌！？　詰めるからちょっと落ち着いて…」
「待てないの！」

グイグイとトウカが横から押してくる。
けっこう痛い。
でも、ユリの密着できて幸せかも。

※

「えー、お客様、もしよろしければあちらの席にご案内いたしますが…」
「ここがいいの！」
「は、はい…」

引きつった営業スマイルとともにウエイトレスさんが言葉を引っ込める。
（…できれば席変わりたいな…）
二人が美人だからか、トウカの声が大きかったのか。
店中の視線を集めている気がする。

「にゃふふ～♪　あ。ウエイトレスさん、シフォンのチョコレートケーキ一つとアールグレイください」
「…そちらのお客様は…？」
「……サンドイッチとフルーツサンドと、普通のアイスティー」

「……水でいいです……」
「それでお願いします♪」
「…了解しました」
トウカはご機嫌なのだが、俺とユリはぐったりしていた。
※
「ふわああ。これ、おいしい！」
「…このサンドイッチも、けっこう…」
なんだかんだで美味しい料理に舌鼓をうつ二人。
二人の笑顔を見ていると、やっぱり一緒に来てよかったと思える。
（今週は色々と迷惑かけたしなぁ…）
申し訳ないという気持ちも込めて、今日は二人に楽しんでもらい。
「何ぼーっとしてんの？」
そう思って二人をぼんやりと見ていたらユリに言われてしまった。
「え？　美味しそうだな、って」
「…楽しい？」
「うん」
「…本当にばかだよね、クロって」
「あー、…そうかも」
ユリにしみじみ言われて、苦笑いが浮かぶ。
「ほら、…食べなさいよ」

そう言ってユリが差し出してきたのは、ハムと卵のサンドイッチ。
ユリの食べかけ。

「い、いくつか種類あるみたいだから、全部食べてみたいのよ。残り、あげる」
「……ありがと」

素直じゃない言葉に照れながら、直接口をつけた。

「！　…受け取ってから食べなさいよ、意地汚いわね…」
「ん、わかった。けど、これ美味しいね」

素直にサンドイッチを受け取ってから、ユリに言う。

「すごく美味しいけど、もう一口くらい食べる？」
「……ちょうだい」
「ほら、『あーん』して」
「……あー、ん……」

ユリに餌付けをしてみました。
してあげた後、やっぱり『ばか』と言われました。

でも、まだまだサンドイッチあるんだよね～。…ふふふふ…。

※

「…クロちゃ～ん…」
「ん？」
「こっちも美味しいよ～」

恥ずかしがるユリをたっぷり堪能していると、今度はトウカに服を引っ張られた。
フォークに刺したケーキを突き出してくる。

「お口あけて」
「あーん」
「あーん♪　…にゃああ、クロちゃん可愛い～♪」

チョコクリームのたっぷりついたケーキを口の中へ入れられる。
甘い。けど、美味しさだけを残してすぐに溶けていく。
（…甘いものあんまり得意じゃないけど、これなら平気だな…）

「はい、おかわり♪」
「あ～ん」
「あ～ん♪　…あ、ごめん！」

トウカが笑顔で差し出したフォークの狙いがわずかにそれた。
無事に本体は口の中に収まったが、唇の端にクリームがついてしまった。
おしぼりを持ってトウカが言う。

「ごめんなさぃ……トウカがとってあげる…」
「お願いします」

トウカの提案に素直に頷く。
（可愛い女の子にこんなことをしてもらえるなんて、何か勝ち組って感じじゃない？　違う？）
とりあえず、すごく気分いいよね。

「もうちょっと下を向いて？」

「うん」
「…ん～」

言われたとおりに下を向くが、不満そうな顔をして唸られた。
トウカの手の中のおしぼりが動く気配すらない。

「えっと、どう…」
「クロちゃん、…もっと下向いて、目つむって？」
「あ、ごめん……え？」

ぺろっ

「ト、トウカ！？」
「にゃふふふ～。取れたよ～♪」
「い、いい今、どうやって…」
「ケーキもっと食べる？」

再びトウカがフォークを突き出してくる。
テーブルの上に置かれたおしぼりに、クリームがついているようには見えなかった…。

※

「あれ？」

二人とイチャイチャして、もう周りの視線なんか気にするものかという新境地に達した俺。
コップをとって水を飲もうとしたら空だった。

「んみゅ？　お水なくなっちゃったの？」

自分の紅茶を飲んでいたトウカが気づき尋ねてくる。

「そうみたい。…もう一回頼むか」

「お水を頼むの？　トウカの飲む？」

「じゃあ、ちょっともらえる？」

「ん、いいよ～」

トウカがカップを差し出すのではなく、何故か傾ける。

（ちょっと飲んで、俺に残りをくれるのか？）

そう思ったが、様子が違うというか。

完全に９０度になった。

空のカップがテーブルに置かれる。

そして、にこりと笑うトウカ。

何故かほっぺが膨らんでいた。

「…その中身は、もちろん空気だよね？」

「んんん♪」

笑顔のまま、俺の顔をはさむようにして手を伸ばしてくる。

「え、と、あのさ…」

「ん～♪」

（なぜ口移しを選ぶ！？）

トウカの顔が近寄って、唇が重なろうとする。

「…やめなさい」

べしっ！

「ごくっ！　…あうぅ、飲んじゃった…」

「ばか冬歌！」

ぎりぎりでユリのチョップが乱入し、そこで終わりとなった。

（あ、危なかった）

公衆の面前で投下とキスをするところだった。

…さっきのあれは、一応違うからね？

というわけで、俺が新境地から住み慣れた日常へ帰って喫茶店を出た。

さすがに恥ずかしすぎて、とてもじゃないが残れない…。

第37話：もう、××にいけない…

「クロちゃ～ん、ここ入ろうよ！」

トウカに引っ張られていった先はちょっと高級そうなブティックだった。

マネキンが着ている服も、俺の安物とは格が違う。

「ここに来たのは初めてだけど、トウカたちのお気に入りのお店なんだよ！」

「へえ、他にもあるの？」

「やっぱり知らないのね…。××駅から歩いて五分かからないところ」

××駅というのは俺たちの家から一番近い繁華街がある駅だ。

特急とかが止まるような規模の大きなところ。

「ふうん。全然知らなかった」

「…クロの服、ちょっと見てあげる」

「トウカも選ぶ！」

「え、ちょっと、二人とも…」

両手を掴んでいる二人にひきづられるように男向けの洋服売り場へ。

色々と着せ替えさせられた。

そして、トウカが間違ってカーテンを開けて、下着を見られてしまった……。

（…い、一瞬だったから平気だったかも…）

一縷の望みに託す俺をあざ笑うかのように、二人の会話が耳に届いた。

「……トウカ、い、今の見た……？」

「うううん！　クククロちゃんの、は、はだ……」

「それ以上言わないでくれ！」

※

「…クロ、ごめんってば…」

「クロちゃ～ん…」

「……」

店の隅で絶望を表現する俺。

（見られた…もうお婿にいけない…）

泣き崩れたい気分だ。

「クロちゃん、許してぇ…」

「あ、あの、…か、カッコよかったよ！　ね、トウカ！」

「え、あ、うん！　す、すっごくドキドキした♪」

「い、意外と筋肉質って言うか、男の子なんだなって、その…」

「……恥ずかしいので、もうやめてください……」

二人の追い討ちに恥ずかしすぎて死にそうです。

「「……ご、ごめんなさい……」」

真っ赤になって頭を下げる二人を怒れないし、褒めてもらえて悪い気はしないんだけどね……。

※

というわけで俺は一人で店を出た。
一旦別行動を取ろうということになり、二人はもうちょっと服を見るらしい。
ブラブラして、ちょっと目についた店に入る。
アクセサリーショップ。

店内には所狭しと様々なアクセサリーが置かれていた。
ネックレス、ブレスレット、ベルト、指輪などなど。

（銀のナイフまであるとは…）

どこのホラー映画だ？
内心でツッコミを入れつつ商品を見て回る。
床から天井までの高さのガラスケースに、整然と並ぶ銀の輪の数々。
全部シルバーアクセサリーと括っているが、色んな種類があるんだって驚く。
この辺りはシンプルなデザインが多いみたいだ。

（綺麗だな…）

女の子ってこういうの好きそうだし、二人に何か買ってあげようか。
（そうだよな。今日が二人との初デートだし、何か記念になるものを贈ろう）
『女の子に贈るプレゼント』と考えて真っ先に思い浮かんだもの。

（指輪、とか…）

※

もちろん深い意味はない。

（…ないのだが、でも、ちょっとくらいはそういう意味にとってもらいたい…）

その上で二人が喜んでくれたら、凄く嬉しいわけで。

俺は指輪の物色を始めた。

（…へえ、この辺りは彫刻とか透かしとかだな。…お、アレとか、けっこういいな…）

アクセサリーとかあまり興味はないのだが、そんな俺でも見惚れるような見事な細工の指輪ばかり。もちろん値段もそれなりだ。

（でも、二つくらいなら買える）

帰りに買い物をするつもりだったので、実は今月の生活費が入っている財布を持ってきている。

（…ユリとトウカに……コレもいいな……うーん…）

こうして、店の中にある指輪を全部確かめていった。

第３８話：プレゼント（妄想つき）

（買った、買ってしまった…！）

ポケットの中にある二つの箱の感触を確かめながら、つい駆け足になる。
給料３ヶ月ではないが、去年まで貰っていた小遣い３ヶ月分くらいはした。

（……俺が貰っていた小遣いが少ないのか、指輪が高すぎるのか……）

まあ、バイトとかしてれば別なのだろう。
俺も何かやろうか。
無事高校に入ったことだし、いつまでも帰宅部でダラダラするよりいいかもしれない。

（で、クリスマスとか、俺がバイトで稼いだ金でプレゼントあげないな……）

……さすがに８ヶ月後なので気が早すぎる。

（あと、誕生日プレゼントとかだな）

ユリの誕生日は７月、トウカの誕生日は３月。
ユリの方がけっこう近いので、バイトした金でプレゼントをするなら早くバイトを決めないと困りそうだ。
ちなみに２月１日が俺の誕生日で、前回は二人の手作りケーキと一緒にプレゼントをもらった。

トウカのプレゼントは『マッサージ券』という恐ろしいもの。
どんなことをするのかを聞いたら「クロちゃんがしてほしいなら、どんなマッサージだってしてあげるよ？」と真顔で言われた。
おじさんへの誕生日プレゼントはただの『肩たたき券』だったらしいので、微妙な差でも嬉しかった。
ネットで調べたバリのオイルマッサージとか頼みたかったが、度胸がなくて机に閉まってある。

ユリのプレゼントは定期。
驚いて、どうしてこれを選んだのか聞いたら「……だって、電車通学になるじゃない。クロはどうせまだ買ってないと思ったし」という返事がきた。
普通に売っているもので、けっこう使いやすい。
だがそれ以上に嬉しいのは、あの時まだ合否が発表されてなかったのに買っていてくれたユリの信頼だろうか。
ついでに色違いでユリとお揃いでもある。

（…やはり、値段よりも心か）

自分が貰った時、二人の気持ちが込められていると感じてすごく嬉しかった。
バイトを探すのと同時に、じっくりと時間をかけて二人へのプレゼントを探すことにしよう。
まあでも、さっき買った指輪はけっこう良いものだと思う。

（どんな顔をするだろう…）

受け取ってもらえないとか、嫌な顔をされるとかはあえて考えない。
考えても悲しくなるだけだし。

（「指にはめて」とか言われたりしちゃったりして……）

ヤバイ、想像だけで楽しすぎる。

☆

なんてニヤニヤしてたら声をかけられた。

「お、黒井じゃん。何してんの？」

振り返ると奴がいた。

「……だ、大介」

第３９話：一人ぼっち？

（…嫌なやつに会った）
ぶっちゃけ、そう思った。
ユリと一緒にいるところを見られるのもアレだが、昨日一緒に見たアイドルＴＯＫＡと一緒にいるというのもアレで、美少女二人とお買い物、プレゼントは指輪、となるとアレすぎる。

つまり、かなりまずい。

「…あ、ああ、別に…定期あるし、ヒマだからちょっと買い物に」
「あ、そうなの？　じゃあ一緒に遊ぼうぜ！　ちょうど俺もブラブラしててさ～。連絡くれればよかったのに」
「あ、ああ、すまんすまん」

嬉しそうに言う大介には悪いが、お前のことなど欠片も思い浮かばなかったよ。

「あ、クロ……井くんに、高野くん？　なにしてるの？」

（ここでユリたちも登場ですか！？）
神も仏もないとはこのことか…。

「！　ししし白鳥さん！？」
「……あー、その、今さっきばったり会っちゃってね」
「そ、そうなんだ」
「し、白鳥さんこそ何の御用で？　……それにそちらのお嬢さんは？」

（触れてくれるな大介）
そう言いたいところだが、俺が口出しするのはおかしい。
必死に目でブロックサインを送る。
（しゃべるな、誤魔化してくれ！　コイツはトウカのことアイドルだって知ってるんだ！）
俺の念波が届いたのか、大介に気づかれないようユリが小さく頷いた。

「……こっちは私の妹……」
「妹の白鳥冬歌です！　はじめまして！」
「「……」」

（お、終わった…）
何とか名前を誤魔化すなりしようとしたのに、自分から名乗るなんて……。
だが、トウカの礼儀正しさを叱ることなどできない。それは美徳である。
……別に大介に知られても実害はなさそうだが、例の友人もいるし、姉は学校のアイドルで妹は本物のアイドルだなんて知られたら、また一波乱起こりそうだ。
少なくとも絶対に噂になるし、ユリへ告白をしようという奴らが増える。
（ああ、学校に行くのが怖い）
明日からの学校生活に戦慄する気分だったが、次の大介の言葉に拍子抜けした。

「おお、なるほど。お姉さんと一緒でアイドル顔負けの可愛らしさですね」
「ありがとうございます！」
「あ、僕は高野大介、こっちは黒井夢。お姉さんのクラスメイトで

す」
「そうなんですか。いつも姉がお世話に……」
「冬歌」
「あ、あはははは、何でもないです、すみません」
「はあ……、じゃあ、高野くん、クロ…井くん、私たちはこれで失礼するわね」
「はい！　さようなら！」
「……さよなら……」
本当に二人とも帰っていってしまった。
「……」
俺、置いてけぼり。
「いや～、さすが白鳥さんの妹だけあって可愛かったね」
少しは空気を読め。
だが、一応確認しておこう。
「……アイドル顔負け？」
「本当にそんな感じ！　事務所のスカウトとかされてそうだよね」
「……うん、そうだね」
（大介……お邪魔虫だし、空気も読めないけど、お前は本当に良い奴だよ）

第４０話：両手

「そうだ、聞いてくれよ！　実は昨日、白…」

ポケットの中の携帯が震えた。
開くと、メールの受信が一件。

『駅』

相変わらずのメールに笑ってしまう。

「…すまん大介、急用を思い出した」
「え？」
「さらばだ…！」
「ちょっと、黒井！？」

後ろで大介の叫びが聞こえるが気にしない。
だって、二人を今日のデートに誘ったのは俺だから。
道端で偶然出会っただけの親友など振り返る価値も無い。

「黒井ー！　また明日ー！」
「…おう、じゃあな！」

…振り返る価値ぐらいはあった。
大介ってけっこういい奴だし。

※

走りながらユリに返信した。

『すぐ向かう』

駅に着いて途端、またメールを受信。

『二階の本屋さんにいます』

（今度はトウカか…なぜ交互にメールが来るんだ？）

謎だが、『了解』と返して階段を駆け上がった。

受信。

『遅い』

「…メールくるの早すぎだよ」

ユリとトウカの姿、見えてるし。

二人に近寄った。

「遅い」

開口一番がそれか……。

「……ごめん」

「クロちゃん、早すぎるよ！」

「え？」

「次はトウカがメールする番だったのに！」

「…何をしてるんだ君たちは…」

二人に置いていかれたと思って、でもやっぱり二人は優しいなぁ、

と感激して急いできたのに…。

泣きたい。

「クロ。そろそろ戻ってお弁当の材料を買いに行かない？」
「トウカも荷物持ってあげる～♪」

そう言って、当たり前のように二人が俺の手をとる。

「……よし！　行こうか！」

それだけで元気になる単純な俺だった。

※

「…あ、あのさ…」
「何？」
「んみゅ？」

スーパーの帰り。
人がそこそこ居るのだが、たぶん視線を集めまくっている。
俺の弁当の材料とは言っても、それほどの量ではない。
ビニール袋二つくらいで十分だ。
もちろん俺が食べる分なのだから、俺が持つつもりだった。
なのに。

「…ユリ、トウカ。重くない？　俺が持つよ？」
「ダメ」
「にゅふふ。クロちゃんの仕事は、トウカたちと手を繋ぐことなの～♪」

何故か俺の両手は別のもので塞がれている。

「いや、やっぱり女の子にだけ荷物持たせて俺が手ぶらって変でしょ？」
「諦めなさい」
「トウカがして欲しいんだからいいの♪」

二人ががっちりと握っているので手を離せない。
乱暴に振りほどかないと無理だろう。
もちろん、俺にそんなことは出来ない。

「……重かったら言ってよ？」
「うん♪」
「無理なら最初から持っていないわ」

こうして、家まで二人に運んでもらうこととなった。
……男として情け無いとは思うが、そんなにしてまで俺と手を繋ぎたいのか！と思うと嬉しすぎる。

ユリ、トウカ。
本当にありがとう。

第４１話：指輪の行方…

三人でご飯を食べてまったりした後、ユリとトウカが帰っていく。
玄関で見送った後、俺はため息をついた。

「……指輪、どうしよう……」

なんか、渡すタイミングがさぁ……。
二人に荷物運んでもらった後で渡すのって嫌だし。
その後、ユリがすぐに調理を始めてしまったから、邪魔じゃないかってちょっと思ってしまったらなかなか言い出せなくなった。
食事が終わったら！って思ったら、バラエティーをトウカが見たいって言い出して三人で一緒に見たんだけど、テレビで観客が爆笑している状態。
ムードがないとかそういう問題ですらない。
（……ポケットの中ですでにスタンバイしていたというのに……）

「明日辺り、渡すか……」

（でも、一人一人別々に渡すと誤解をよびそうだ……）
先に渡した方が喜ぶだろうし、後に渡した方は悲しむと思う。

「……次、三人が揃った時でいいか……」

もちろん、次というと翌朝の登校時なのだが、それは除いた次だ。

※

翌朝。

三人でいつものように登校中。

「…え、トウカ、今日仕事なの？」

「うん……、写真集に載せる写真で、いくつか撮りなおしたいって言われたのぉ」

沈んだ声でトウカが言う。

確かに、一度終わったと思った仕事をやり直すとなると落ち込むのは分かる。

「あ～、仕事ならしょうがない、か」

「うぅぅ……クロちゃん、浮気しないでね……」

（仕事じゃなくて、そっちの心配してたのか！？）

「……しないよ」

（……たぶん、ユリとトウカ以外で俺を相手してくれる人もいないし）

考えてみると情けないことだ。

浮気は男の甲斐性というが、本当にするかどうかは置いておいて、女性に見向きもされないのって男としてどうなんだろう。

「ほらトウカ。ここの角右でしょ？」

「……うにゅ……。このまま駅まで行こうと思ったのに……」

「ばか言ってないの」

「だって、駅に行って戻っても遅刻しないくらいの時間だよぉ？」

トウカがいつものように食い下がる。

「予習でもしてなさい」
「……クロちゃぁん……」
潤んだ瞳で見られても、俺に選択肢はないんだ……。
「がんばれよ、トウカ」
「うううぅ……。じゃあね～」
ドナドナが似合いそうな足取りでトウカが去っていった。
「じゃ、行きましょうか」
「……嬉しそうだよね」
「なんのことかしら？　ほら、さっさと歩いて！」
こうして、いつものように電車に乗った。

第４１話：指輪の行方…（後書き）

『いたずら』が一段落つくまで休載します。
集中して、いい作品を書こうと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7590f/

イタズラ

2010年10月9日22時01分発行